

市原市永田窯跡群発掘調査報告書

平成4年度

財団法人 千葉県文化財センター

ながつた
市原市永田窯跡群発掘調査報告書



千葉県

平成 4 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県には、2万5千か所にのぼる多くの遺跡が所在しますが、その中で古代の窯業遺跡は35か所確認されています。これらの遺跡は、古代における生産技術と流通経済の実態を明かにし、地域の歴史、文化を解明する上で貴重なものです。学術的調査により規模、構造、年代等が把握された例は数少ないのが実情です。

このため、千葉県教育委員会では、昭和62年度から国庫補助を受けて、重要遺跡確認調査の一環として、窯業遺跡、中でも実態解明の遅れている須恵器窯跡のうち、重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしてきました。

今年度は、市原市久保に所在する著名な永田・不入窯跡群のなかの永田窯跡の調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。その結果、窯跡7基以上の存在が確認され、多数の須恵器が出土しました。過去に14基が確認されており、今回の調査例を加えると20基以上の大規模な窯業遺跡であることが判明する等大きな成果がえられました。今後、上総国分寺跡及び周辺の集落遺跡の出土資料との対比によって、上総国における古代の生産と供給の実態解明が可能になることが期待されます。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用の一助として、広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、文化庁、市原市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心から感謝申し上げます。

平成5年3月31日

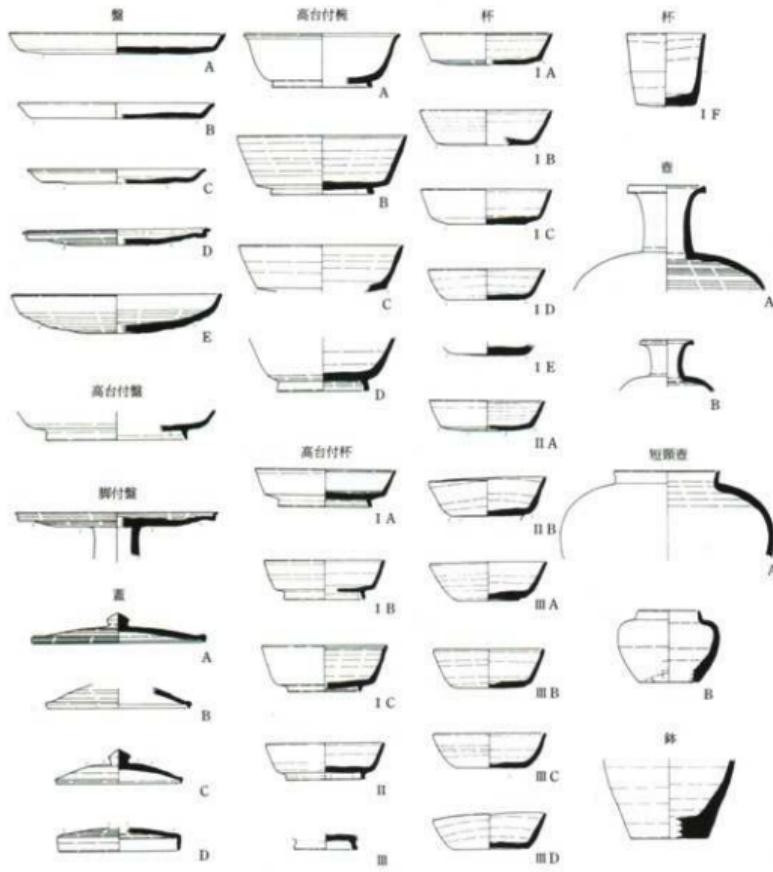
千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 白石竹雄

凡　　例

1. 本書は市原市久保697-13他に所在する永田窯跡（遺跡コード219-063）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている窯業遺跡確認調査の第2期第1年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 発掘調査期間は平成4年10月1日から同年10月30日であり、調査面積は200m²である。整理作業および報告書作成は11月1日から12月28日までである。
4. 調査及び整理、報告書作成にあたっては、研究部長天野努、部長補佐渡辺智信の指導のもとに、主任技師郷堀英司、小林信一が担当した。
5. 現地調査にあたっては、土地所有者の鶴岡　信・神崎照夫・平田むつ各氏から所有地の借用を快諾いただき、明賀邦夫氏からはさまざまの便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表します。
6. 現地調査から報告書刊行にいたるまで、田所　真氏をはじめとする市原市教育委員会の関係者各位ならびに、下記の諸機関・諸氏からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略）

市原市教育委員会・市原市文化財センター・県立房総風土記の丘・今泉　潔・須田　勉・高橋　康夫・吉田恵二
7. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図（鶴舞）を使用し、図版1の航空写真は京葉測量株式会社、1991年撮影（コース番号C39A-27,原版は1/12,500）を使用した。
8. 本書の遺物挿図の縮尺はすべて1/3である。
9. 土器の分類は右図に示したとおりである。各器種とともに法量および形態によって分類している。高台付杯・杯についてはさらに調整技法（ヘラケズリ）で細分を行っている。
 - I類：底部全面に回転ヘラケズリがおよぶもの。
 - II類：底部の外周に回転ヘラケズリがなされ、底部中央に回転糸切り離し痕が残存するもの。
 - III類：底部回転切り離し無調整のもの。



本文目次

序

凡例

目次

I	はじめに	1
1.	遺跡の位置と環境	1
2.	研究略史	1
II	調査の概要	5
1.	調査の目的と調査区の設定	5
2.	調査の経過	5
III	遺構と遺物	9
1.	第1トレンチ (H II区)	9
15号窯跡		
2.	第2トレンチ (G II・H II区)	14
16号窯跡		
3.	第4トレンチ (DIV・EIV区)	17
17号窯跡・1号溝、灰原A・灰原B、2号溝		
4.	第5トレンチ (G II区)	24
18号窯跡、灰原C、1号焼土遺構、2号焼土遺構・3号溝		
5.	第3トレンチ (G II区)	29
1号住居跡、2号住居跡、3号住居跡		
IV	まとめ	30
1.	窯跡群の規模	30
2.	窯跡の変遷と出土遺物	31
3.	底部切り離し技法の再確認	32
4.	結語	33

挿図目次

第1図 永田窯跡の位置と周辺の関連遺跡(1/25,000)	2
第2図 調査トレンチ配置図	6
第3図 永田・不入窯跡トレンチ配置図(1/2,500)	7
第4図 第1・2トレンチ内検出遺構(15・16号窯跡)位置図(1/150)	10
第5図 15号窯跡平面・断面図(1/40)	11
第6図 15号窯跡および第1トレンチ出土遺物(1/3)	12
第7図 16号窯跡平面・断面図(1/40)	13
第8図 16号窯跡遺物出土状況図(1/20)	14
第9図 16号窯跡出土遺物(1/3)	15
第10図 16号窯跡出土の火襷のある須恵器杯	16
第11図 第2トレンチ出土遺物(1/3)	16
第12図 第4トレンチ内検出遺構(17号窯跡、1・2号溝、灰原A・B)位置図(1/200)	18
第13図 17号窯跡、1・2号溝、灰原A・B遺構図(1/60)	18
第14図 17号窯跡出土遺物(1)(1/3)	19
第15図 17号窯跡出土遺物(2)(1/3)	21
第16図 灰原A出土遺物(1/3)	22
第17図 灰原B出土遺物(1/3)	23
第18図 第5トレンチ内検出遺構(18号窯跡、3号溝、灰原C、1・2号焼土遺構)位置図(1/150)	25
第19図 18号窯跡、3号溝、灰原C、1・2号焼土遺構平面図(1/40)	25
第20図 18号窯跡出土遺物(1/3)	26
第21図 灰原C出土遺物(1/3)	26
第22図 第3トレンチ内検出遺構(1・2・3号住居跡)位置図(1/200)	27
第23図 1・2・3号住居跡遺構図(1/80)	27
第24図 1号住居跡出土遺物(1/3)	28
第25図 3号住居跡出土遺物(1/3)	28

表 目 次

第1表 15号窯跡および第1トレンチ出土遺物	34
------------------------	----

第2表	16号窯跡および第2トレンチ出土遺物	34
第3表	17号窯跡出土遺物	34
第4表	灰原A出土遺物	35
第5表	灰原B出土遺物	35
第6表	18号窯跡出土遺物	36
第7表	灰原C出土遺物	36
第8表	1号住居跡出土遺物	36
第9表	3号住居跡出土遺物	36

図版目次

図版1	航空写真 永田、不入窯跡と周辺の地形(1/12,500)	図版7 遺構 1. 第5トレンチ18号窯跡遺物出土状況
図版2	遺構 1. 永田窯跡群遠景 2. 永田窯跡群遠景 3. 第1トレンチ15号窯跡検出状況	2. 第3トレンチ1・2号住居跡検出状況 3. 第3トレンチ3号住居跡検出状況
図版3	遺構 1. 15号窯跡検出状況 2. 15号窯跡全景 3. 第2トレンチ16号窯跡遺物出土状況	図版8 遺物 図版9 遺物 図版10 遺物 図版11 遺物
図版4	遺構 1. 16号窯跡全景 2. 16号窯跡遺物出土状況 3. 16号窯跡全景	図版12 遺物 図版13 遺物 図版14 遺物
図版5	遺構 1. 16号窯跡全景 2. 第4トレンチ全景 3. 第4トレンチ灰原A・Bセクション	図版15 遺物 図版16 遺物
図版6	遺構 1. 第4トレンチ17号窯跡セクション 2. 第5トレンチ全景 3. 第5トレンチ2号焼土構、3号溝検出状況	

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境

遺跡の所在する市原市は千葉県のほぼ中央、房総半島の西側の付け根付近に位置し、市域の中央部を貫くようにして養老川が東京湾に流入している。この養老川は著しい蛇行を見せながら北流し、この両岸に沖積低地と河岸段丘が形成されている。遺跡は養老川の中流域東岸の河岸段丘上に所在し、段丘面は周囲を古い川跡によって囲まれ、典型的な曲線・短絡地形であり、永田窯跡群はこの南側斜面に立地し、標高は48~50m前後である。本遺跡の北側斜面には不入窯跡群があり、本来、この二つの窯跡群は一つの大きな窯跡群として捉えられるものである。

遺跡の周辺には2か所の須恵器窯跡がみられる。本遺跡の南西約800mの地点には7世紀前半の須恵器窯跡を含む大和田遺跡^[1]（ほかに古墳・横穴がみられる）があり、本遺跡の北約3.5kmには3基の須恵器窯跡を有する石川窯跡^[2]が存在し、上総地域のなかでも窯業が盛んであった地域として評価される。また、永田窯跡群と同時期の遺跡としてはほかに、南総中学遺跡^[3]が挙げられる。この遺跡は集落遺跡であり、永田・不入窯跡、石川窯跡の製品と考えられるものが出土している。

2. 研究略史

永田窯跡群に関わる調査・研究の初出は1963年のことであり、「南総郷土文化研究会誌」第3号のなかで藤原文夫氏^[4]が「永田雜記」として遺跡の性格および発見の経緯を述べている。

本格的な発掘調査の手が加わったのは1974年のことで、千葉県教育委員会の依頼により、国士館大学考古学研究室によって発掘調査が実施されている。調査の結果、鶴首状に延びる河岸段丘斜面の南西斜面に位置する永田（ながつた）窯跡群で2地点14基、北東斜面の不入（ふにゅう）窯跡群で1地点4基の窯跡が検出され、地下式と半地下式の無階無段窯がみられる。この調査報告書の小結では永田・不入窯跡群の変遷を次のように捉えている。

操業開始期を永田3・14号窯、全盛期を永田1・5号窯、不入4号窯、終末期を永田13号窯、不入3・4号窯とみなし、全盛期に8世紀末から9世紀初頭の年代を与えている。

焼成されていた製品は、須恵器杯・高台付杯・高台付椀・蓋・盤・高台付盤、円面鏡・鉢・瓶・壺等であり、壺は杯等に比して少ないことが知られる。

この永田・不入窯跡の調査成果が明らかになると相前後して、須恵器の消費遺跡からの報告も現れてくるようになる。

1977年、須田 勉氏は上総國分尼寺に隣接する坊作遺跡調査概報^[5]のなかで、永田・不入窯跡群成立の背景について「國分寺造営事業の一環として把え」、窯跡群成立年代の上限を國分寺建立の詔が発布された741年としている。また、同年に刊行された山田水呑遺跡の調査報告書^[6]のな



第1図 水田窯跡の位置と周辺の関連遺跡(1/25,000)

かで金子真土氏は、回転糸切り離しによる良質な須恵器の一群について、市原市に存在する窯跡の製品の可能性を指摘し、編年第IV群の土器群に位置づけている。

1978年には石川窯跡の存在が報告され⁽⁹⁾、その製品についても永田・不入窯の製品と同様に国分寺に供給されていたと考えられた。そして、永田、不入窯跡を経て石川窯跡への系譜が考えられた。

1981年、國平健三氏は「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」のなかで永田・不入窯の分析を行い、その年代と性格さらには石川窯について次のように言及している。

年代については、遺構の切り合い関係と焼成床面ごとの遺物の対比を行い、武藏地域の窯資料と検討したうえで、8世紀第2四半期後半から第3四半期前半に位置づけ、石川窯跡については9世紀初頭以降と考えた。また、永田窯と不入窯との焼成器種の違いに着目して、不入窯をより官窯的性格を強く帯びた窯と認識している。なお、この「官窯」の製品の供給先として、国府や国分寺などを挙げている。

1983年には、「房総における奈良・平安時代の土器」のシンポジウムが開催され、そのなかでも、永田・不入窯跡の年代は、国分寺造営の絡みと埼玉県前内出窯跡の年代観から8世紀第3四半世紀に比定されている。また、1984年には、三辻利一氏が（財）千葉県文化財センターから胎土分析を依頼され、県内の7か所の窯跡出土の須恵器の分析を行っている。その結果、胎土の特徴から印旛郡・千葉市域・市原市域の3地域に区別できることが明らかとなった。

そして、同年から3次にわたる永田・不入窯跡群の灰原確認調査が（財）市原市文化財センターによって行われ、1985年と1989年にそれぞれ成果が公表された。その成果を要約すると、灰原が窯跡前面の水田下に認められること。不入窯跡は4基以上の操業がおこなわれている可能性が少ないと。永田窯跡では從来の分布範囲の両端に窯跡群がみられること。灰原が河川の氾濫によって擾乱されていることなどが明らかにされた。また、同じく（財）市原市文化財センターが行った調査で永田窯跡群隣接地から工房跡と考えられる竪穴が1基検出されている。

1987年には83年のシンポジウムを受けて「房総における歴史時代土器の研究」のシンポジウムが開催され、永田・不入窯跡群についてのいくつかの問題提議がなされた。まず、高橋康男氏が永田・不入窯跡の各窯跡の器種構成から3期の時期に区分し、いずれの時期も杯などの日常雑器を中心で焼成されているとした。そして、仏器や硯などの国分寺に関係がありそうな遺物の焼成はこれらの変遷の後半になされていることを指摘し、国分寺契機説への疑問を投げかけた。また、國平氏が述べた官窯の問題を取り上げ、官・民窯の区別が不明瞭で、永田と不入窯跡との終焉の様相が同様であることから、両者の性格的な違いは認められず官窯とは言い難いことを指摘した。また、このなかで田所 真氏は市原市坊作遺跡の土器の時期区分を行い、そのなかで「上総国分尼寺の造営を目的として成立した坊作遺跡の第1期土器群において、概に、通有な形態の、永田・不入窯跡産須恵器が認められるという意味において、その生産の開

始が、国分寺造営説に先行する。」と述べ、永田・不入窯跡の国分寺契機説への反証を提示している。

1988年には千葉県教育委員会によって石川窯跡の範囲確認調査が行われ、3基の須恵器窯跡の存在が確認された。^[17]

1989年には、田所氏が「上総須恵器考」^[18]のなかでこれまでの上総地域の須恵器の研究史をまとめたうえで、永田・不入窯跡群の成立時期や契機を再検討する必要があることを提言している。この1989年には、木更津市上名主ヶ谷窯跡の確認調査^[19]が千葉県教育委員会によって行われた。永田・不入窯跡とはほぼ同時期の須恵器窯跡の存在が確認され、その製品の中の杯・高台付杯については永田・不入窯の前半のものと、技法・法量・形態・胎土・焼成が類似したものがあり、同窯と永田窯との関連が注目される。なお、上名主ヶ谷窯跡は須恵器窯の後に瓦陶兼業窯となり、さらには瓦専用の窯が築窯されている。この窯跡群で焼成された瓦は上総国分寺・尼寺ではいまのところ出土せず、木更津周辺の氏寺などに供給されたものと考えられている。

以上、永田窯跡群に関連するこれまでの研究を概略したが、本窯跡群の位置付けは年代的にも性格的にもいまだ揺れ動いているのが実状である。今後は、永田・不入窯跡のみならず、上総地域の他の窯跡や消費地のあり方も再度検討し、多角的に探っていくかなければならないものと考える。

註

- (1) 高橋康男 1988 「大和田遺跡」(財)市原市文化財センター
- (2) 奥田正彦 1988 「市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書」 千葉県教育委員会
- (3) 倉田芳郎ほか 1978 「千葉・南總中学遺跡」 市原市教育委員会
- (4) 藤原文夫 1964 「永田雑記」『南總郷土文化研究会誌』第3号 南總郷土文化研究会
- (5) 大川 清 1976 「千葉県市原市 水田、不入須恵器窯跡調査報告書」 千葉県教育委員会
- (6) 須田勉 1977 「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要 IV』 上総国分寺台遺跡調査団
- (7) 金子真士 1977 「出土土器に関する二・三の問題」『山田水呑遺跡』 山田水呑遺跡発掘調査団
- (8) 酒井清治 1978 「遺跡周辺の表探遺物 石川窯址」「千葉・南總中学遺跡」 市原市教育委員会
- (9) 国平健三 1981 「相模國の奈良・平安時代集落構造(上)」「神奈川考古」第12号 神奈川考古同人会
- ⑩ 佐久間 豊・豊春幸正・鶴生 衛 1983 「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」「シンポジウム資料 房總における奈良・平安時代の土器」 史館同人ほか
- ⑪ 三辻利一 1984 「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『千葉県文化財センター 研究紀要』8 千葉県文化財センター
- ⑫ 山口直樹 1985 「千葉県市原市 水田、不入窯跡」 (財)市原市文化財センター
- ⑬ 田所 真 1989 「千葉県市原市 水田、不入窯跡」 (財)市原市文化財センター
- ⑭ 田所 真 1989 「永田遺跡」「市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡・師崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡 一不特定遺跡発掘調査報告(1)」(財)市原市文化財センター
- ⑮ 高橋康男 1987 「IV 生産遺跡 1 上総永田・不入窯」「房總における歴史時代土器の研究」 房總歴史考古学研究会
- ⑯ 田所 真 1987 「II 上総国 1 市原市坊作遺跡(旧市原郡)」「房總における歴史時代土器の研究」 房總歴史考古学研究会
- ⑰ (2)と同じ
- ⑱ 田所 真 1989 「上総須恵器考 須恵器生産遺跡研究略史」「史館」第21号 史館同人
- ⑲ 佐久間 豊 1989 「木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書」 千葉県教育委員会

II 調査の概要

1. 調査の目的と調査区の設定

今回の調査は、過去4次にわたる調査成果を踏まえ、工房跡の有無の確認と新たな窯跡の確認を主眼にして調査を実施することにした。すなわち、これまでの調査から窯体の存在が予想される斜面部の2地点と工房跡が予想される台地平坦部の1地点の3地点にしおって調査を行い、この3地点に任意のトレンチを5か所設定して遺構の検出につとめた。トレンチの設定は任意であるが、各地点で基準となるポイントを定めて座標を読みとることによって正確な位置を落とせるようにした。

各トレンチの位置は第2・3図を参照していただきたい。なお、大グリッドの呼称および第3図については(財)市原市文化財センターのものを踏襲させていただいた。セピア色のトレンチは以前に調査がなされたものであり、黒色が今回設定したトレンチである。

今回の報告では確認された遺構が多く、かつ、実測可能な遺物が膨大な量におよんでいる。このため、実測個体は各遺構の一般的な器種および性格をあらわす器種に止めている。ただし、破片でも比較的数量が少ないものについてはなるべく図化に努めた。

2. 調査の経過

発掘調査は平成4年10月1日から開始した。午前中に機材などの搬入・設営および、調査地の草刈を実施して環境整備につとめる。午後から工房跡があると予想される平坦面にトレンチ(第3トレンチ)を設定して発掘を開始した。この地点は、現在瓦屋の廃棄場となっており、攪乱を受けている部分がある。

10月6日には第3トレンチの遺構確認面までほぼ下げ終わる。攪乱部に切られるためにその全貌を知ることはできないが、住居跡らしき落ち込みを検出したため、一部拡張する必要がある。また、合わせて第3トレンチよりも西側の斜面部に、斜面に直行するものと平行するトレンチを各1本設定し発掘を進めた。10月7日には斜面に直行するトレンチ(第1トレンチ)で窯体を検出する。この窯体の全貌を知るために、斜面上方へトレンチを拡張する。斜面に平行するトレンチ(第2トレンチ)の南半分では多くの須恵器が出土した。

10月8日、第1トレンチをさらに上方に拡張して窯体全体を検出した後(15号窯)、セクションベルトを設定して窯体内の精査を開始する。

第2トレンチの北半分でも窯体の焚口から燃焼部を検出する(16号窯)。窯体規模を確認するためにトレンチをさらに北へ拡張する。その後、窯体内の精査に着手する。15号窯に比して遺存状態は良好で、多量の窯体内遺物が出土する。

10月12日には、第1トレンチから南東に400mの地点の斜面にトレンチを設定し(第4トレン

チ)、調査を開始する。表土は10~20cmと薄く、すぐに地山面が現れる。小礫の多い地点で焼土も多く検出され、窯の存在が予想される。また、第3トレンチで検出した落ち込みの性格を確認するために拡張を開始する。

10月13日~16日にかけては第3トレンチで検出した遺構の精査に着手し、竪穴住居跡2軒(1・2号住居跡)を検出した。

10月19~22日にかけては、1・2号住居跡の精査、実測、写真撮影を行い調査終了する。また第4トレンチの断ち割りを実施し、東側で灰原を検出した。このことから、窯体は現在道路となっている部分に存在するものと考えられる。16号窯の遺物出土状況の写真撮影を行う。

10月23日、第4トレンチで検出した灰原は2ヵ所で、東端を灰原A、その上にのるものを灰原Bとした。その西側で17号窯を検出。地下式の窯で、焼成床面は2枚以上ある。第3トレンチをさらに拡張し、住居跡1軒を検出(3号住居跡)。第2トレンチよりも17m東側の畑で地主が耕作中に焼土と多くの遺物を発見。窯の存在が予想される。

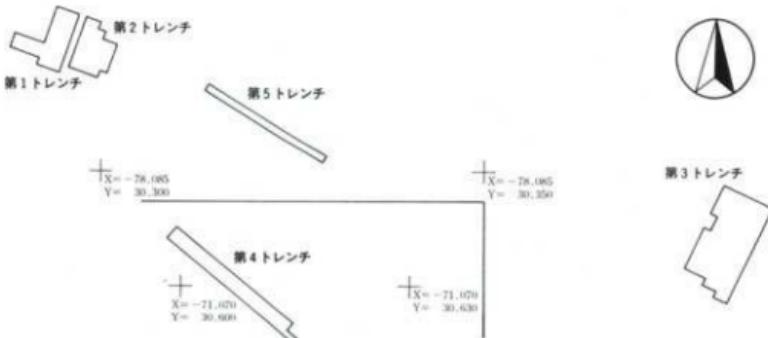
10月26日にはこの窯の存在が予想される地点に1×20mのトレンチを設定して掘り下げる(第5トレンチ)。このトレンチで窯体1基、灰原1か所(灰原C)、窯体と思われる2か所を検出し、写真撮影などを行う。3号住居跡の精査・遺物取り上げ・実測・写真撮影を行う。

10月27日、15号窯の遺物の取り上げ実測に着手する。第4トレンチ内の遺構の平面実測を行う。

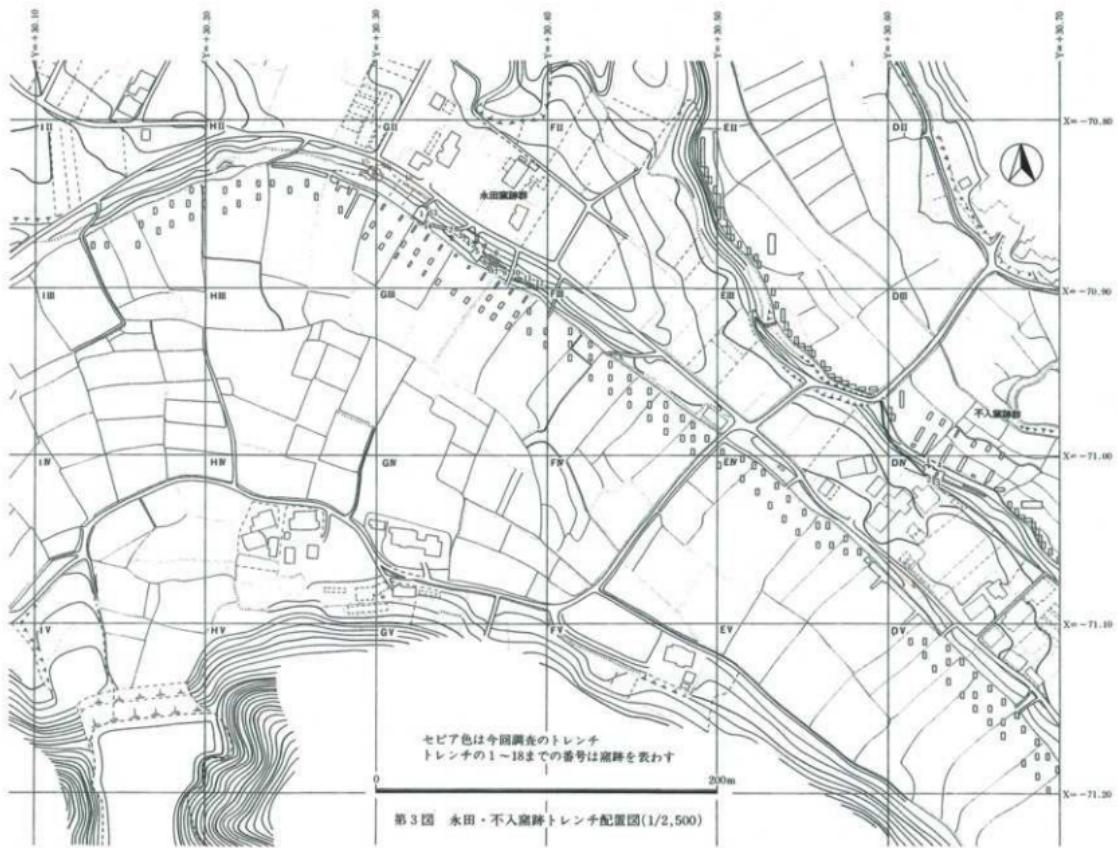
10月28日、第5トレンチの遺構の平面実測を行い、埋め戻し作業に入る。第4トレンチの17号窯を断ち割った結果、地下式の窯で焼成床面は2枚あり、天井部が崩落したものと判断できた。セクションの実測・写真撮影を行う。第2トレンチの16号窯の遺物を取り上げる。

10月29日、16号窯の遺物取り上げ。各トレンチの埋め戻し。

10月30日、15・16号窯のセクション・平面図実測終了後、埋め戻しを行い、すべての作業を終了した。



第2図 調査トレンチ配置図



III 遺構と遺物

今回の調査では、設定した5つのトレンチのすべてから遺構・遺物が検出された。第1トレンチからは須恵器窯跡1基、第2トレンチでは須恵器窯跡1基、第3トレンチでは竪穴住居跡3軒、第4トレンチからは須恵器窯跡1基、灰原2か所、溝2条、第5トレンチからは須恵器窯跡1基、灰原1か所、溝1条、焼土遺構2か所を検出し、全部で須恵器窯跡4基、灰原3か所、須恵器窯の可能性がある焼土遺構2地点、溝3条を確認することができた。

遺物は須恵器のほか、土師器・石器が検出されている。

以下述べる窯跡の号数については国士館大学による調査で、永田窯跡として14号まで番号が付けられているので、15号窯跡から順次番号を付けて報告することにしたい。

1. 第1トレンチ (HII区)

第1トレンチからは15号窯跡が検出された。窯に伴う溝等の付属施設は検出することができなかった。なお、第1トレンチ・第2トレンチの下方水田面は、すでに(財)市原市文化財センターの調査によって、灰原・物原が確認され、3基の窯跡の存在が想定されていた。そのときの調査では杯・高台付杯・高台付椀・蓋・盤・高台付盤・脚付盤・長頸壺、瓶が検出されている。

15号窯跡 (第4~6図、第1表、図版2・3・8)

遺構

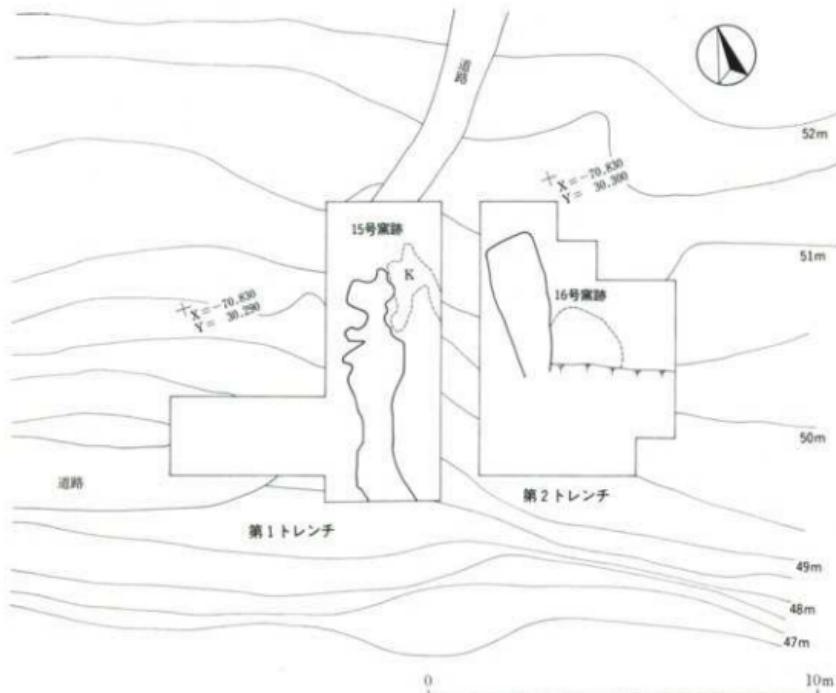
本窯跡は、国士館大学が以前に調査を行った永田窯跡でも最も西寄りの窯跡(1号窯跡)よりもさらに40mほど西北に位置している。

半地下式の窑窯であり、標高は焚口床面で48.3m、窯尻と考えられる部分で50.2m、窯体の主軸方位はN-18°-Eである。窯跡の上は水田に下りるための道がとおっており、窯跡の遺存状況は悪くほとんど窯床部分(スクリーントーン部)しか残存しておらず、形態についても不明確なものとなっている。窯体の長さは推定で4.7m前後であり、焚口は床幅で0.75mであり、検出面から窯床までの深さは最も残りの良い部分で22cmを測る。傾斜角は12°である。前部は調査範囲外の南に伸びるものと思われる。

焼成部の最大幅は推定で1.4mであり、焼成部には1段の段を有する。床面は1枚のみで、貼床も認められず、窯は地山の明白なシルト層を掘り込んで作られている。焼成面は青灰色を呈する。

出土遺物

出土遺物は破片が多く、窯体内で集中するところはみられなかった。破片数は576片で、重量は5.55kgを測る。器種は蓋A、高台付椀A・B、高台付杯I C・高台付杯II、杯I D・杯II A



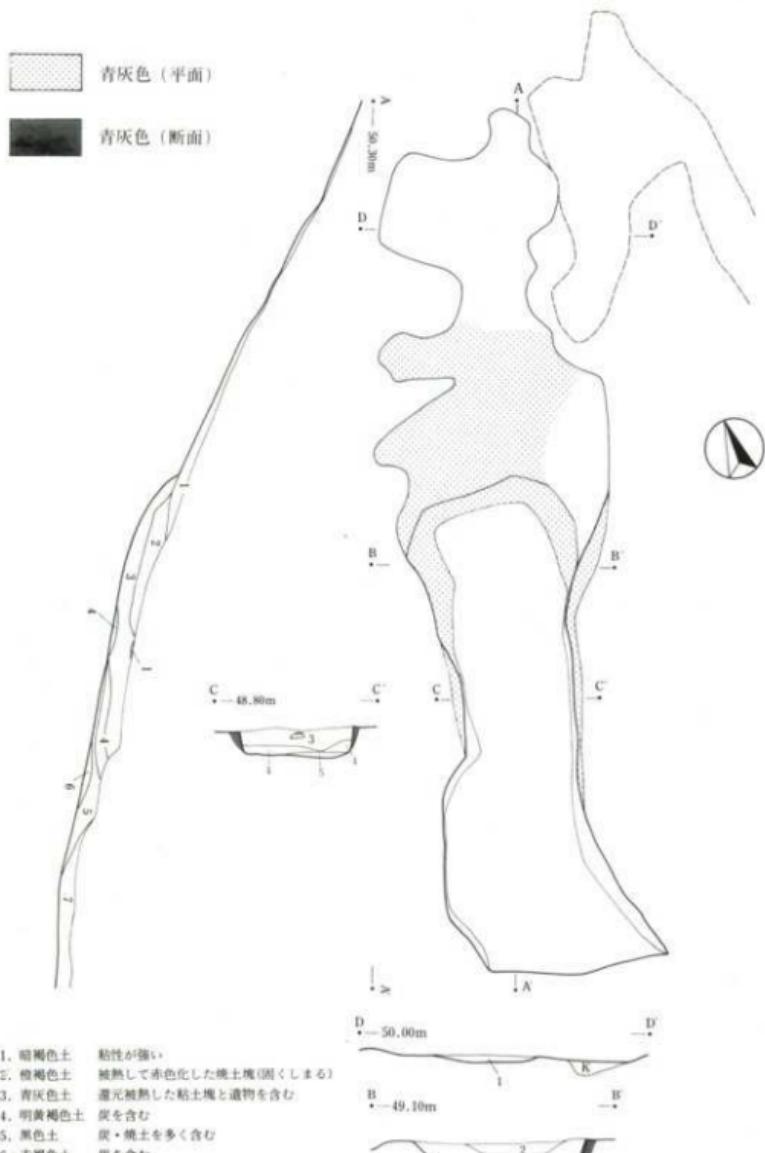
第4図 第1・2トレンチ内検出遺構(15・16号窯跡)位置図(1/150)

と壺の破片がみられ、焼成不良の製品もみられるが大半は良好な製品で占められている。それぞれの個体数は蓋23個体、高台付椀10個体、高台付杯4個体、壺3個体(以上は破片より判断)である。杯は個体数が多いので判断に苦んだが、底部破片で確実に別個体と考えられるものを数量化したところ106個体を数えた。本窯跡は無高台の杯を主体に焼成されていたと考えられる。なお、器種不明は10個体であった。

蓋Aとした1は高台付椀の蓋と考えられるものであり、口径は18.4cmを測る。端部のつくりが特徴的であり、内面の天井部にはエゴテ状の工具痕がみられる。高台付椀Aとなる2は金属器写しの椀であり、焼き歪があるもののしっかりしたつくりである。口縁部外面には1条のきわめて細い隆線がめぐっている。3は高台付椀B、4は高台付杯IIであり、後述する17号窯跡の高台付杯と比較すると口径で1.5cm縮小し、底部外面外周に回転ヘラケズリが施されるが中央部に回転糸切り痕を残すものである。5は高台付杯I Cであり、6~8は杯I Dで底部外面は全面回転ヘラケズリが施されている。6の口径は13.7cmを測るが、他のものは12.5cm内外であり、この口径のものが杯類の大半を占め、一般の集落から出土する典型的な永田・不入窯跡の

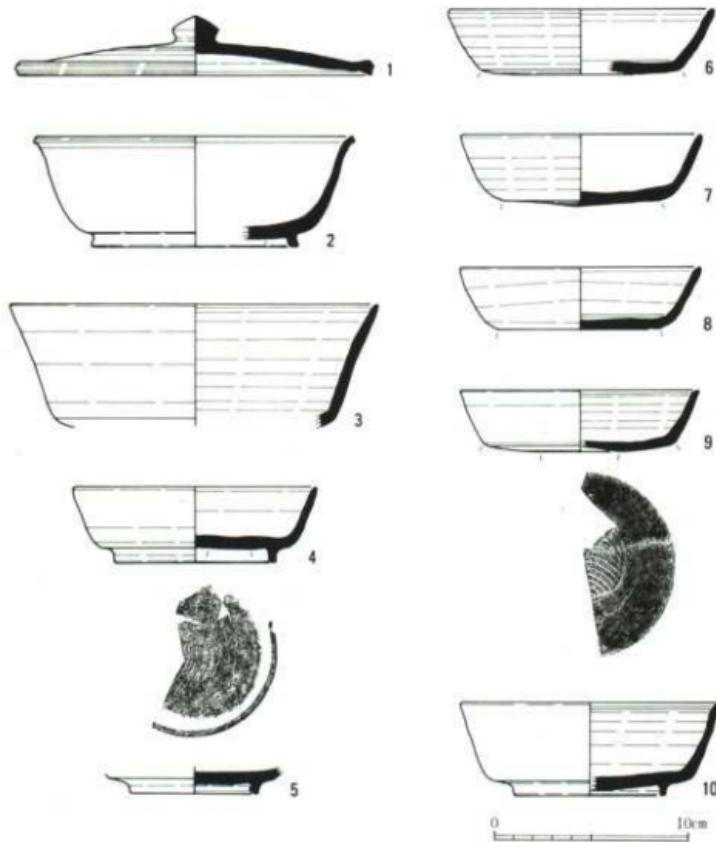
 青灰色(平面)

 青灰色(断面)



第5図 15号窑跡平面・断面図(1/40)

0 2m

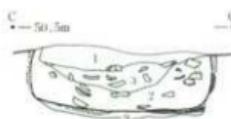
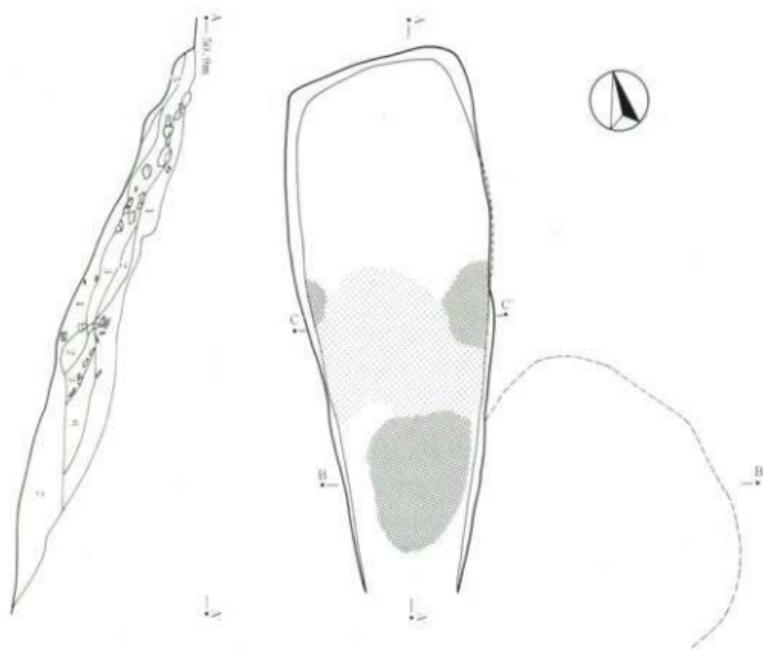


第6図 15号窯跡および第1トレンチ出土遺物(1/3)

製品である。9は杯IIAであり、底部外面の外周に回転ヘラケズリが施され、中央部に回転糸切り痕を残すものである。

なお、本窯跡から出土した杯のなかで、底部外面の中央部が残存するものは48個体であり、そのうち底部全面回転ヘラケズリが施されるものは30個体、糸切り痕が残存するものは18個体である。また、破片であるが回転糸切り離しのみのものと回転ヘラケズリ後に手持ちヘラケズリがさらになされているものが各1個体ずつ認められる。

このほかに第1トレンチからは、284片、3.44kgの須恵器が出土し、高台付椀BおよびDと考えられるもの7個体、高台付杯IIが1個体、I C (10) が2個体と壺・甕片が認められる。杯は底部の残存破片で個体を分類したところ、47個体が存在し、そのうち底部中央まで、回転ヘラケズリが確認できるものは20個体、回転糸切り後に外周を回転ヘラケズリが施されたものは



青灰色(平面)



赤色

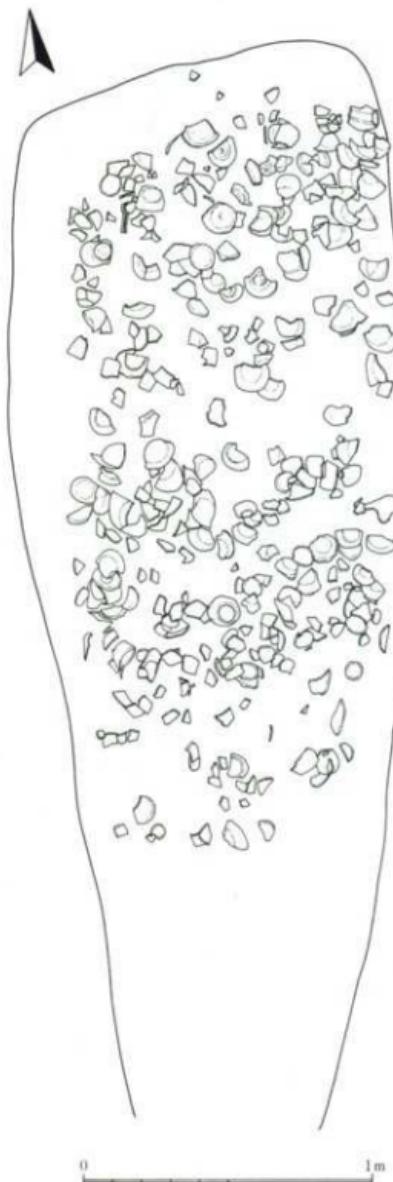


青灰色(断面)

- 1. 黒褐色土 焼土粒、炭化粒を僅かに含む。
- 2. 暗褐色土 烧けた粘土塊を多量に含む。遺物が多い。
- 3. 褐色土 遺物を多量に含む。
- 4. 黒褐色土 遺物を多く含む。
- 5. 暗黃褐色土 粘土粒を少量含む。
- 6. 黑色土 焼土粒を僅かに。遺物を少量含む。
- 7. 黑色土 粘土粒と炭を少量含む。
- 8. 黑色土 焼土粒と炭を多く含む。
- 9. 黑色化シルト

0 2m

第7図 16号窯跡平面・断面図(1/40)



第8図 16号窯跡遺物出土状況図(1/20)

13個体であり、窯体内出土の杯I・杯IIの比率と同様なものとなっている。

2. 第2トレンチ(GII・HII区)

第1トレンチの東隣に設定した窯体確認のためのトレンチであり、16号窯跡が検出された。

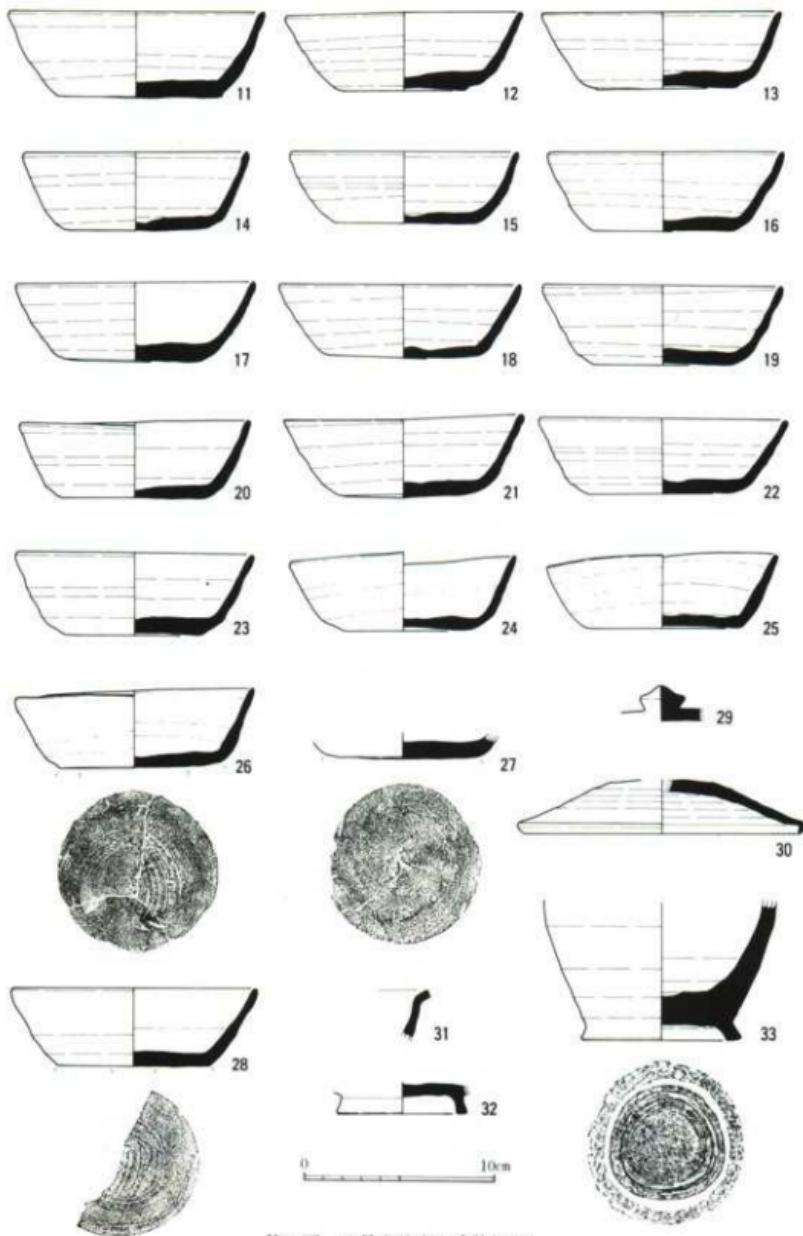
16号窯跡(第4・7~10図、第2表、図版3~5・8~10)

遺構

15号窯跡の東約2.5mの位置に所在する半地下式の窯室である。窯体長は3.77mであり、主軸はN-5°-Eにみられる。標高は焚口床面で49.5m、窯尻床面で50.7mを測る。

窯尻部から方形に膨れ、焚口部に向かってすぼまる形態を呈し、あまり変化のないものとなっている。遺存状況は良好で、窯体内には多数の遺物が認められた。焚口部の床幅は0.62mで、側壁は右壁が後世の抜根によって破壊され、8cm程度しか残存していないが、左壁は35cm残存している。

床面は窯床中央部が赤化している程度であり、傾斜角は5°である。焼成部の床幅は1.2m前後であり、側壁は40cm前後の遺存である。床面は1枚のみであり、裏込めは検出されなかった。焼成面は、下方部に赤褐色の酸化面と青灰色の還元面が認められ、断面でも酸化・還元面は部分的に観察できた。傾斜角は24°である。なお、窯尻部には部分的にくぼみが存在する。



第9図 16号窯跡出土遺物(1/3)

遺物の出土状況（第8図）からみて、窯は焼成につぶれたものと考えられ、部分的には窯詰めに近い状況で遺物が残存していた。主体となる杯の大半が逆さに伏せられた状態で出土している。数枚が重ねられた上にさらに同じ杯類を組違いに底部を逆さまにして重ね、ピラミッド状に積み上げ、窯詰めしたものと考えられる。また、本窯跡の製品は火憚（わら状のもの）痕が多くの遺物にみられ、なかには「わら」状の繊維が残存しているものがいくつか認められる（第10図）。

出土遺物

窯体内からは7,238片、61.21kgの須恵器が出土し、杯III A・B・C・D、杯I E・杯II B、高台付杯III、蓋A、高台付椀A、壺Aが認められる。焼成時でもおわりに近い時期に窯がつぶれたものと考えられ、遺物には硬質なものから焼成不良で軟質なものまでみられる。色調も青灰色から橙褐色のものまで存在し、なかにはロクロ土師器杯と見間違うものまで認められた。また、15号・17号窯跡の製品と比較すると胎土はあまり良くないものとなっている。

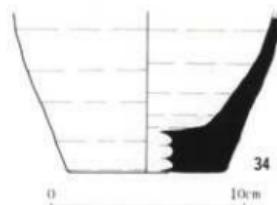
杯の数量化については個体数が非常に多く、類似したものが多いことから主体となる杯III類（底部回転糸切り離し無調整）については、杯底部の個体数を、完形、1/2、2/3、1/3、1/4の残存ごとに数えた。そして、それらを $1/2+1/2=1$ 個体、 $2/3+1/3=1$ 個体というように底部が1/1になるまで合計した数をもって個体を算出することにした。その結果、底部完形は205個体、1/2は182片、2/3は91片、1/3は147片、1/4は268片を数え、換算合計で472個体となった。また、杯I E（27）は3個体、杯II B（26・28）も7個体（これらについては底部の破片1片でも個体と認定。）にとどまり、圧倒的に杯III類が主体を占めていることがわかる。

他の器種は高台付杯III（32）が5個体、高台付椀A（31）が1個体、蓋（29・30）3個体、壺（33）2個体、甕3個体が存在する。これらを合計すると496個体になり、4m未満の窯としてはかなり多量に焼成を行っていたことが言えるだろう。

杯III類は、ロクロ台からの切り離しが粗雑なために、底部が突出気味になるA（11～13）、口縁部が内弯するB（14・16）、口縁部が外反するC（15）、口縁部が直線的なD（17～25）がみられる。なお、高台付椀Aについては窯体内出土であるが、小破片のうえ、胎土的にこの窯跡の



第10図 16号窯跡出土の火憚のある須恵器杯



第11図 第2トレンチ出土遺物(1/3)

ほかの製品よりも良いものであり、16号窯跡で焼成されていたかは疑問なところである。

なお、第2トレンチ内からも須恵器が503片、6.07kgほど出土している。杯III類が多くみられるが、杯IIAが1個体と杯IDも5個体出土しており、西隣りの15号窯跡の遺物と混在している。また、鉢と考えられる遺物も出土（第11図）している。これは胎土・焼成からみて本窯跡の製品であろう。他の器種としては壺と高台付杯が1片出土している。

3. 第4トレンチ（DIV・EIV区）

本トレンチは第1トレンチの南東400mの地点に位置し、地形に沿って横に長さ約22m、幅2mの範囲で窯体を確認するために設定したトレンチであり、トレンチの反対側斜面には不入窯跡がみられる。この第4トレンチの下方水田面も（財）市原市文化財センターの調査によって、灰原・物原が確認されており、4基の窯跡の存在が想定されている。その際の調査で、高台付椀・高台付杯・杯・盤・蓋・風字硯が検出されている。

今回の調査では17号窯跡と灰原A・B、1号・2号溝が検出された。

17号窯跡・1号溝（第12～15図、第3表、図版5・6・10～13）

遺構

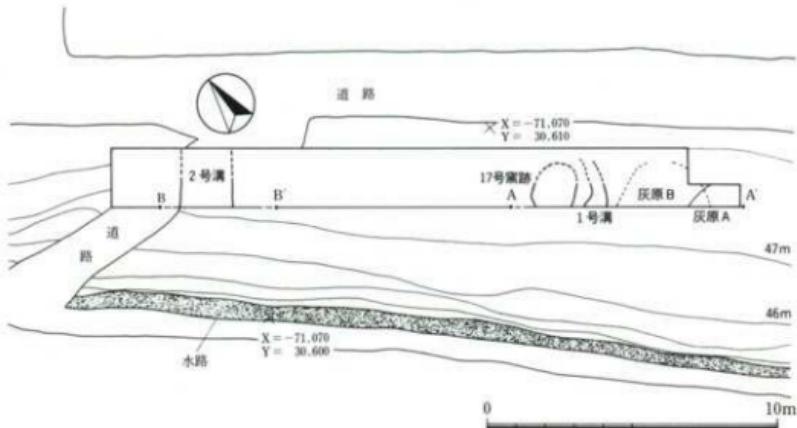
当初、一度トレンチ内の精査を実施したが窯体の確認ができず、トレンチの南壁に沿って幅1mほどの地山の裁ち割り調査を行った結果検出された地下式の窯跡である。また、その際に窯の東隣りに二つの灰原を確認した。地下式の窯であるため保存状況は良好であり、窯は上半が明黄褐色シルト、下半が砂質岩盤をくり貫いてつくられている。窯体の東には幅60cmで深さ20cmの1号溝がみられる。この溝については本窯跡付属の雨水よけの溝と考えられる。窯の長軸の規模については僅か1m幅の断ち割り調査であったため不明であるが、調査した部分は焼成部でも窯尻寄りと考えられ、傾斜角は25°前後である。床面は2面が検出され、ともに青灰色に還元され、側壁もしっかりとした焼成面がつくられている。窯体内から出土した窯壁片には壺片が接着しているものがあり、かなり温度が上がっていたものと思われる。

1次面（下面）の窯床の幅は1.6m、2次面は幅1.7mであり、両方ともに側壁の断面形は「ハ」の字状を呈している。1次面と2次面との間は、基本的に灰色砂層の間層が入るが明確な間層が認められない部分もみられる。天井部は完全に崩落しているが、天井までの高さは側壁から考えて1m程度と推定される。

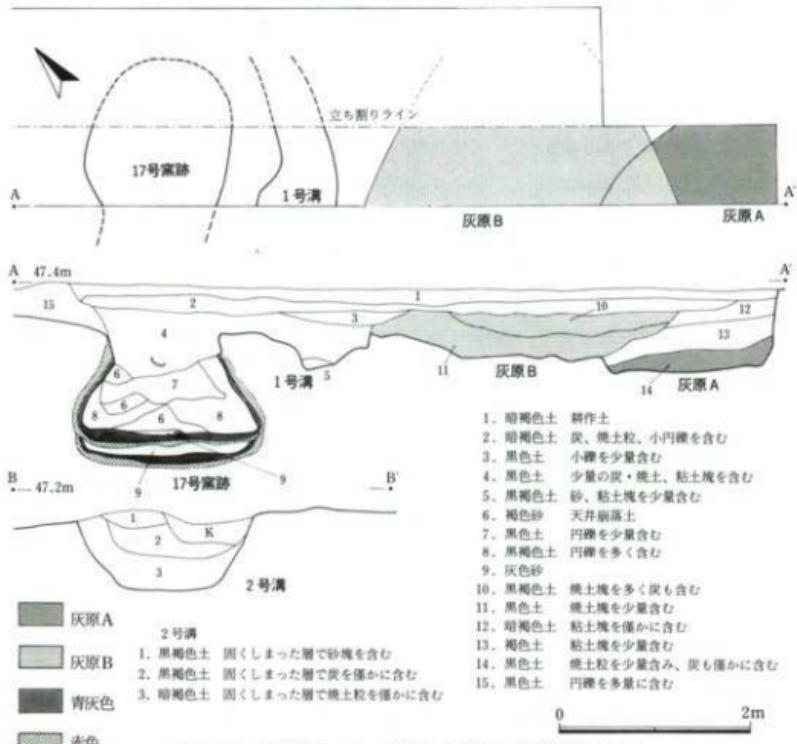
窯跡内の遺物の出土状況は、2次面に遺物が集中し、1次面からは杯片が僅かに検出されただけであった。時期差はないものと考えられる。

出土遺物

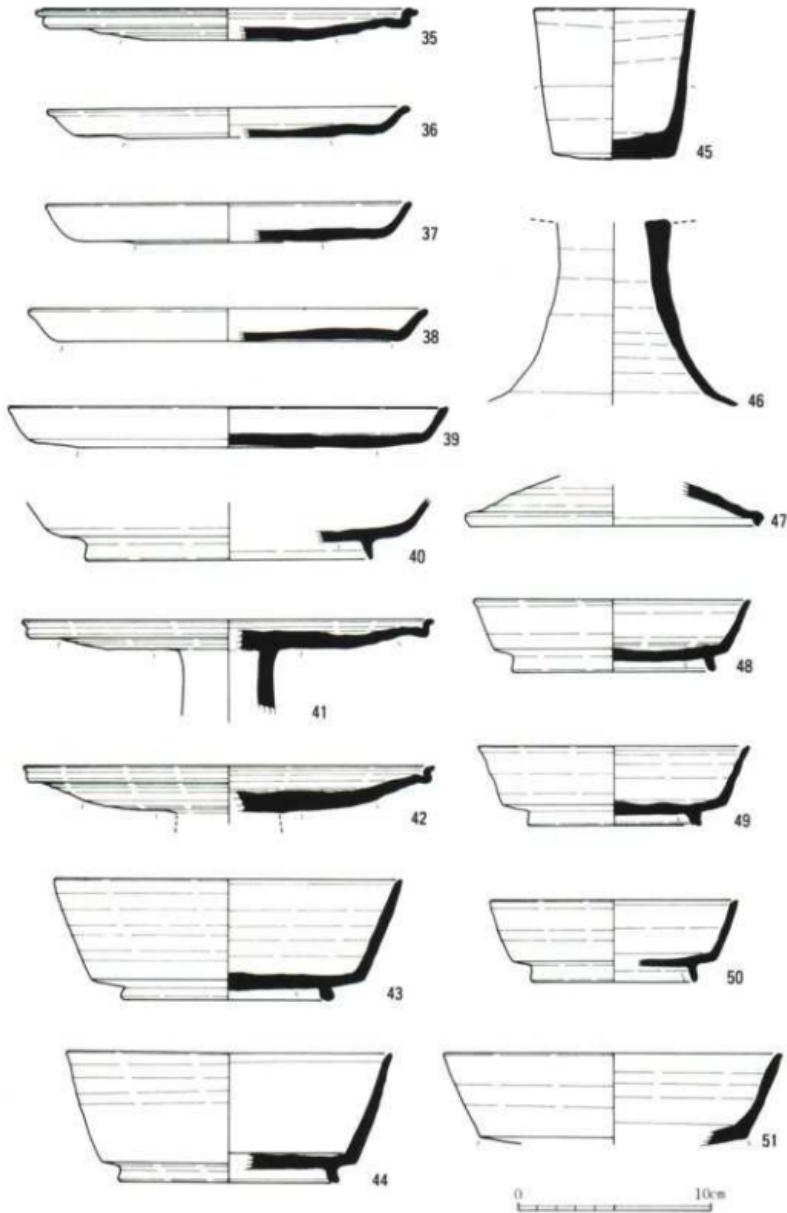
本窯跡からは、198片、7.54kgの遺物が検出された。遺存度良好な製品が多く、高台付杯と盤を主体とした遺物となっている。器種は蓋B・D、高台付椀B・C、高台付杯IA・IB、杯



第12図 第4トレンチ内検出遺構(17号窓跡、1・2号溝、灰原A・B)位置図(1/200)



第13図 17号窓跡、1・2号溝、灰原A・B遺構図(1/60)



第14図 17号窯跡出土遺物 (1) (1/3)

I A・I B・I C・I F、盤A～D、高台付盤、脚付盤、短頸壺A・Bが認められる。全体的に焼成は良好であり、杯・椀・盤類は底部に丁寧な回転ヘラケズリが施されている。認識できる個体の数量は、杯7個体、高台付杯28個体、杯または高台付杯が11個体、高台付椀6個体、蓋3個体、盤31個体、高台付盤1個体、脚付盤6個体、短頸壺2個体と短頸壺の蓋2個体、壺1個体である。

盤については脚付盤と同様な口縁部を有する盤D(35)が注目されることと、口径22cm台のA(39)、20cm台のB(38)、19cm台のC(36・37)というように口径が分かれることが興味深い。ただし、盤Aの個体数が8個体、Bが4個体、Cは9個体であり、Bの個体数が少なくなっている。はたしてこれをもって3つに完全に分離できるかどうかは今後再考を要するかもしれない。また、高台付盤(40)は小破片であるが高台部の形態が特異なので提示しておく。

杯は口径が14cm前後のもので、器高が低い杯I A(54・56)、器高が高いI B(53)、底部がほかのものより小さいI C(55)がみられ、56の底部外面には焼成前につけられた「×」のヘラ記号がみられる。

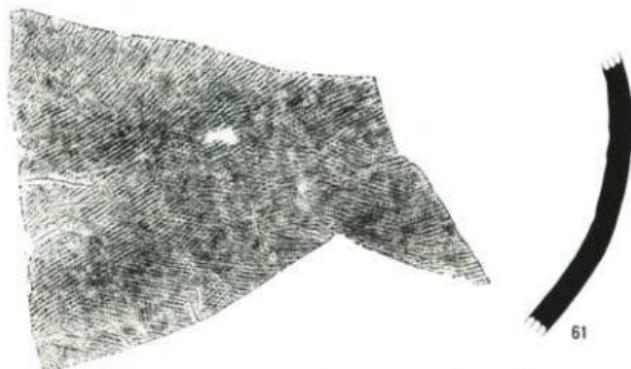
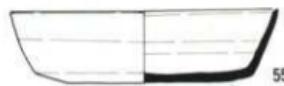
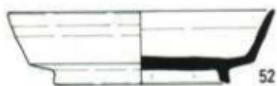
高台付杯は口径が14cm前後のI A(48・49・52)と13cm前後のI B(50)がみられる。この杯I A類で注目すべきことは底部外面中央部に回転ヘラケズリが施されているが、ヘラ切りと考えられる痕跡が認められる(52)ものがあることである。ほかの同類の底部片にも2点これと類似した痕跡がみられ、また、杯I F(45)の底部外面にも同様な痕跡が存在することから、本窯跡の製品はヘラ切り技法でつくられている可能性が指摘できる。41・42・46は脚付盤であり、接合はできなかったが46は42の脚部の可能性が強い。短頸壺A(59)の内面には飴色の自然釉が付着している。短頸壺B(60)の胴部外面下半には手持ちヘラケズリが施されている。短頸壺Aの蓋と考えられる蓋D(57・58)はつまみがつくものである。61は大型の壺であり、胸部外面には平行タタキが施されており、内面にはナデがなされている。

灰原A(第12・13・16図、第4表、図版5・13・14)

灰原Aは17号窯跡の東4mにみられ、深さ17cmほど地山を掘り込んでおり、黒色土のなかに焼土粒と僅かに炭粒がみられる。灰原はトレンチの東にさらに伸びており、幅については今回の調査では確認することができなかった。灰原の厚さは20cmを測り、西側の立ち上がり部は周溝状にくぼんでいる。この灰原の上には15cmの間層を挟んで灰原Bが存在する。

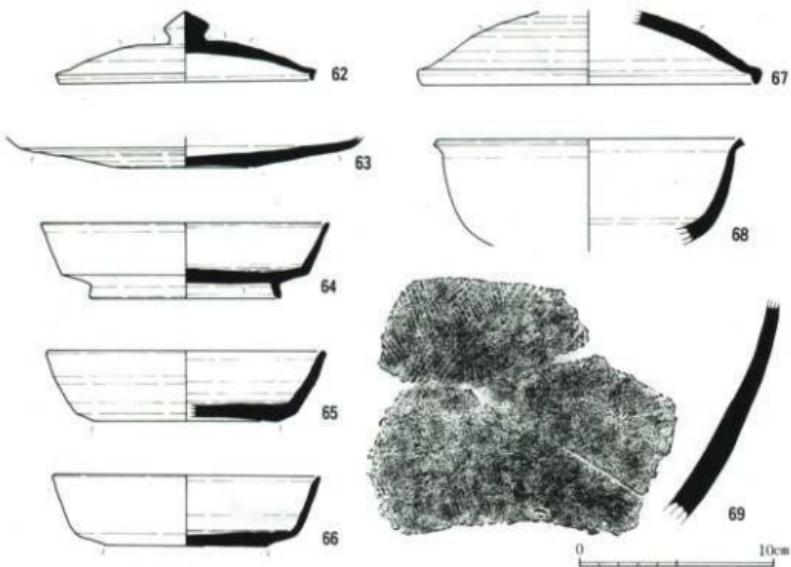
遺物は68片、1.62kgが出土し、焼成が良好なものが多く、17号窯跡の製品と同様に杯類は底部外面に丁寧に回転ヘラケズリが施されている。器種は蓋A(67)、蓋C(62)、盤AまたはBと考えられるもの(63)、口径が15cmと17号窯跡の製品よりも口径が1cm大きな高台付杯I A(64)、杯I B(65)、杯I C(66)、口縁端部が鋭角の高台付椀A(68)、胸部外面に平行タタキが施された壺がみられる。

このほかの器種としては、高台付椀Bと考えられる破片がみられる。なお、杯が重なって融



0 10 cm

第15圖 17號窯跡出土遺物 (2) (1/3)



第16図 灰原A出土遺物(1/3)

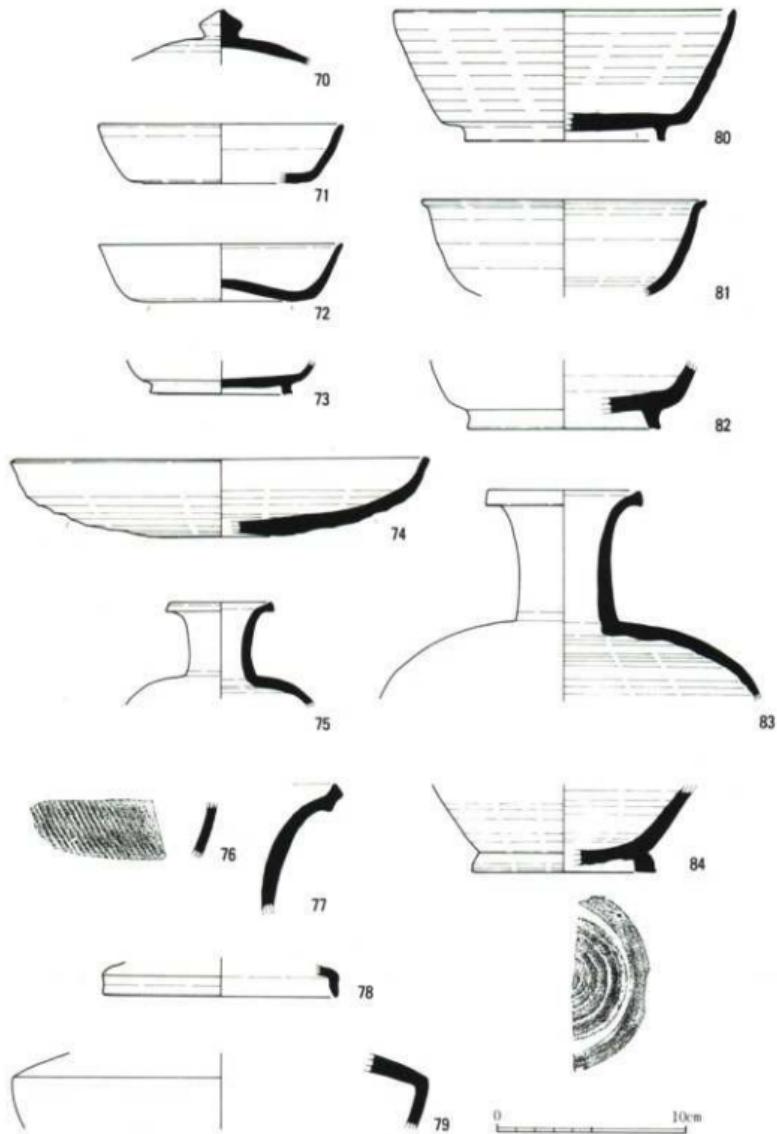
着しているものが認められる。

灰原B（第12・13・17図、第5表、図版5・14・15）

灰原Bは灰原Aの間層1枚を挟んだ上層にあり、17号窯跡から1.5m東で検出した。明らかに灰原Aの窯の操業が終了してからのものであり、当初は土層の断面観察で17号窯跡の上層の4層に明確に切られていると考えられることから、17号窯跡よりも灰原Bが古いものと考えていた。しかしながら、整理作業の過程において、出土した遺物が17号窯跡の遺物よりも技法・法量的に新しいことが判明した。この第4層については、17号窯跡の天井部崩落時の影響なども考えられるため、この部分の土層については面的な調査をおこなったうえであらためて結論を出す必要があると思われる。

灰原Bと灰原Aの灰層の範囲は断面でみると、70cm程度重なっており、灰原Bは2層に分かれ、上層のほうより焼土塊、炭粒の混入が多くなっている。厚さは最も厚い部分で50cmを測る。東側の立ち上がりはなだらかになっており、西側の立ち上がりについては17号窯跡との関係で不明となっているが、土層断面全体をみると灰原の層はなだらかなレンズ状堆積を呈している。おそらく灰原の幅は土層断面にあらわれた3.2mの範囲を大きく越えないものと考えられる。この幅からみると、灰原Bの窯はこの灰原の上方にある道路面下に存在するものと予想される。

遺物は359片、5.91kgが出土した。焼き歪が著しいものも存在し、ほかの遺構と比較して甕の



第17図 灰原B出土遺物(1/3)

破片が多い。器種は、口径13cm台の杯ⅠD(71・72)を主体として、蓋A・B、高台付椀A(81)・B(80)・D(82)、高台付杯ⅠC(73)、盤E(74)、壺A(83・84)・B(75)、短頸壺の蓋D(78)、壺(76・77)が認められる。また盤A～Cのいずれかのものと考えられる破片や、脚付盤などの破片も存在する。79は長頸壺の肩部破片と考えられるものである。なお、杯の底部と考えられる破片に外周回転ヘラケズリが施され、中央部に回転糸切り痕が残存(杯Ⅱ類)するものが1点検出されている。破片のなかには杯の底部外面と蓋の外面が融着しているものが認められ、異なった器種を相互に重ねて焼成していたことがわかる。

第4トレンチ内からはこのほかに、杯等9片、0.81kgが出土している。

2号溝(第12図、図版5)

トレンチの西側部分に所在し、北東に伸びると考えられる溝である。溝幅は1.81mであり、深さは83cmを測る。溝の断面形態は逆台形を呈する。遺物は出土せず、時期や性格は不明である。土坑の可能性も有する。

4. 第5トレンチ(GII区)

第2トレンチの南東13mの地点で斜面に平行して設定した幅1m、長さ18mのトレンチである。地主の方が畑を耕作中に焼土をみつけたため、その方のご好意で急速トレンチを設定して確認調査を行うことができたものである。断面図は作成していない。表土を10～20cm掘り下げたところで、18号窯跡、3号溝、灰原C、1号・2号焼土遺構を検出した。

18号窯跡(第18・19・20図、第6表、図版6・7・15)

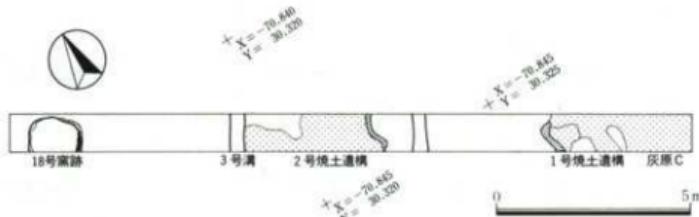
遺構

本遺構はトレンチの西側部分に所在し、16号窯跡から南東へ17mほど離れた所に位置している。検出された部分は窯尻であり、半地下式の寄窯である。上面は削平され、確認面から窯床までは深いところで20cm程度である。標高は50.9mである。主軸は僅か1m幅のトレンチ発掘なので判然としないが、N-32°-E前後となるものと思われる。側壁は窯床から丸味をおびて立ち上がり、右側壁部分は地山まで赤色に変色している。側壁内面は還元化して青灰色となっている部分もみられた。窯床は全体的にしまっている。窯は明褐色の地山に掘り込まれているが、床の断ち割り調査は実施しておらず、床の枚数や裏込めの有無は不明である。

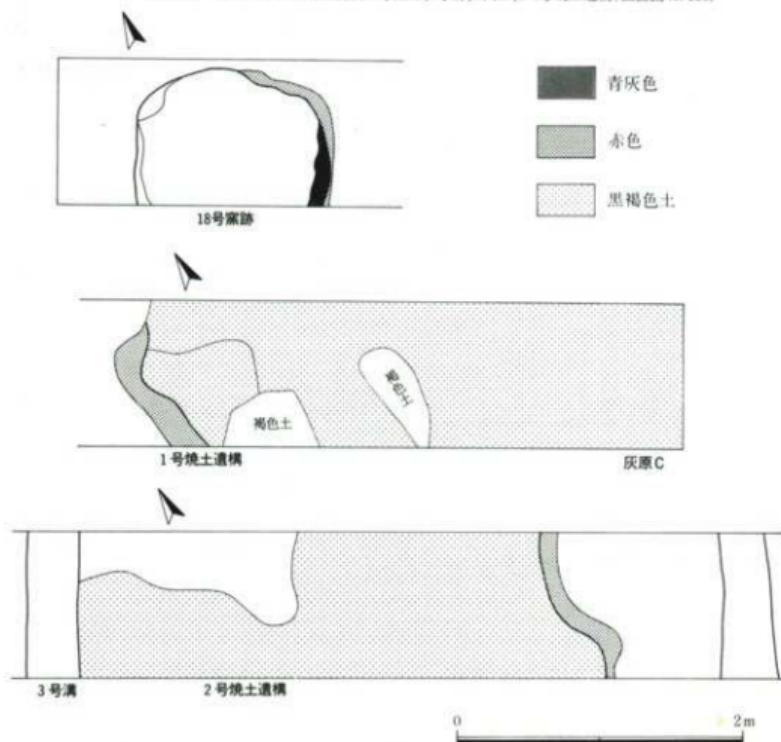
遺物の出土は多く、ほとんどが倒立状態で出土し、16号窯跡の遺物出土状況と類似する。

出土遺物

窯体内からは475片、5.1kgの須恵器が出土しており、すべて回転糸切り離し無調整の杯III類で占められている。杯III Dを主体として、III A(86)、III B(88・90)が認められる。杯の個体数は16号窯跡と同様な底部の算出方法で個体数を計算した結果、45個体を数えた。これらには青灰色のものも認められるが、焼成の悪い灰黄褐色のものが多く、焼き歪と火揮痕がみられるも



第18図 第5トレチ内検出遺構(18号窯跡、3号溝、灰原C、1・2号焼土遺構)位置図(1/150)



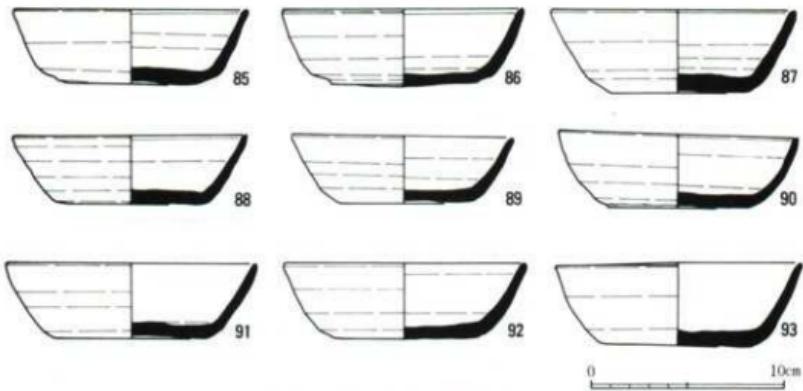
第19図 18号窯跡、3号溝、灰原C、1・2号焼土遺構平面図(1/40)

のが多い。

灰原C (第18・19・21図、第7表、図版6・16)

トレチの東端部に存在し、黒褐色土のなかに焼土や須恵器片が多く認められ、一部に褐色の部分が存在する。

平面的な確認のみで定かではないが、1号焼土遺構を切っていると考えられ、灰原は本トレ



第20図 18号窯跡出土遺物(1/3)

ンチよりもさらに東に広がっている。

遺物は43片、0.33kgが検出され、その大部分が焼成不良の酸化状態で橙褐色を呈したものである。器種は杯 I B (94) や、高台付杯の破片、盤Cなどである。

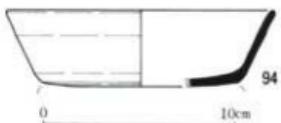
1号焼土遺構 (第18・19図、図版6)

本遺構は灰原Cの西側部分に地山が幅20cmにわたって赤色に焼けた面がみられる部分と炭を含む黒色土、焼土を多く含む褐色土の面が認められる。また酸化状態の須恵器破片を伴っている。これらのことから、赤色化した部分は窯体の焚口部分の左側壁に関連したものである可能性がある。なお、右側壁の被熱部は灰原Cにより破壊されているものと考えられる。遺物は47片、0.28kgが出土したが、細片が多い。杯 I類、高台付杯、甕の破片が認められ、すべて橙褐色の色調となっている。

2号焼土遺構・3号溝 (第18・19図、図版6)

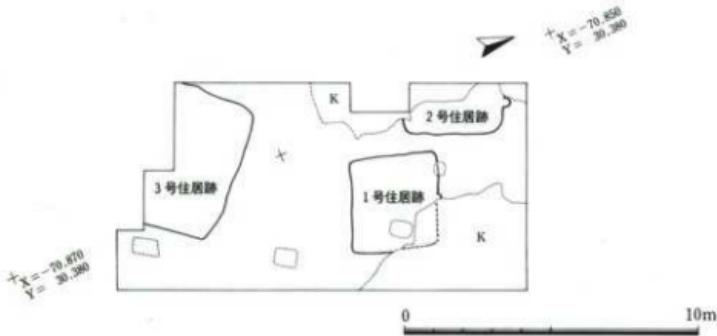
トレンチの中央部で検出し、1号焼土遺構と同じく地山が焼けて赤色の部分が幅15cmにわたって認められた。幅3.65mの範囲で1号焼土遺構よりもやや明るい土層のなかに焼土粒、暗褐色土が混入する面がみられる。この焼土面についても不確かであるが窯体の一部であると捉えることができる。

この両側には、幅25cmの溝と考えられる黒褐色の面が南北に伸びている。西側のものは暗褐色土面を切って存在するようにも見受けられるが、東側の溝は焼土部より70cm離れて存在して



第21図 灰原C出土遺物(1/3)

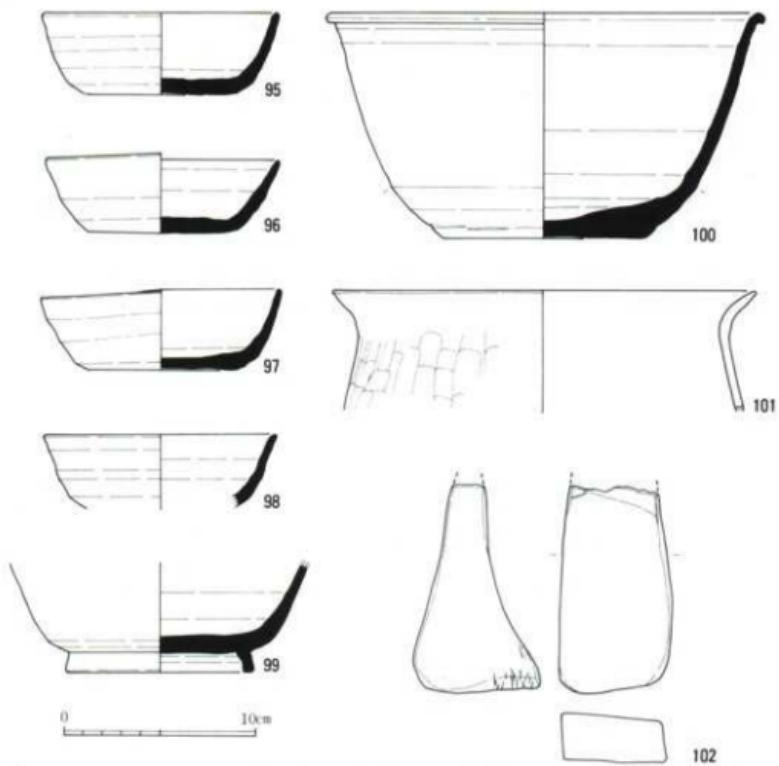
おり、焼土部が窯の一部であるという仮定をするならば、この溝は窯をとりまく雨落ち溝である可能性が考えられる。したがって、両方の溝は1本になる可能性があるのでここでは両者を合わせて3号溝として報告しておく。



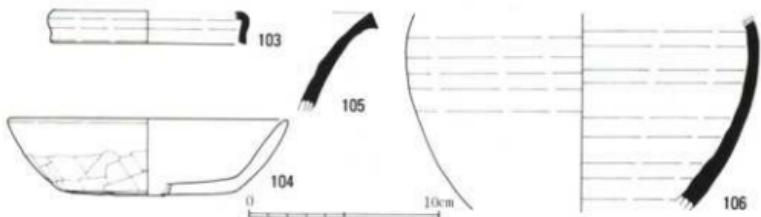
第22図 第3トレンチ内検出遺構(1・2・3号住居跡)位置図(1/200)



第23図 1・2・3号住居跡遺構図(1/80)



第24図 1号住居跡出土遺物(1/3)



第25図 3号住居跡出土遺物(1/3)

なお、2号焼土遺構・3号溝からは遺物の出土はみられなかった。

5. 第3トレンチ (GII区)

第5トレンチの東50mの地点に工房跡の検出を目的として設置したトレンチであり、3軒の竪穴住居跡が検出された。

1号住居跡 (第22・23・24図、第8表、図版7・16)

平安時代初頭の住居跡と考えられ、規模は $2.9 \times 3.2\text{m}$ であり、主軸はN-20°-Eとなる。検出面から床面までの深さは26cmを測り、住居跡の北東隅は擾乱により破壊されている。カマドは北壁中央にみられ、右袖部は擾乱によってなくなっている。床面直上で焼土および炭化材が多く出土し、床面は硬質な部分はほとんどなく、周溝も西側に一部分認められるだけである。南壁に沿った中央部分に、径25cmで深さ27cmの出入口ピットと考えられるものがある。また、住居跡北東部に径30cmで深さ48cmの主柱穴と考えられるピットが検出されている。本遺構は通常の竪穴住居跡と判断される。

遺物は、須恵器には杯III類(95~97)、高台付椀D(99)、鉢(100)がみられ、杯類はすべて永田・不入窯跡の製品であり、鉢についても焼成・胎土から永田・不入窯跡の製品と考えてよいものと思われる。須恵器杯のなかには焼成不良で黄褐色を呈するもの(95~97)がみられる。土師器は「く」の字状口縁の薄手の壺で、胴部外面上部に縦方向のヘラケズリが施されたもの(101)がみられる。ほかには蓋・壺の破片と流紋岩の磁石(102)が出土している。

2号住居跡 (第22・23図、図版7)

住居跡の2/5程度を調査し、検出範囲の1/3程度が擾乱によって破壊されている住居跡である。規模は縦が3.35mで、横は不明である。主軸はN-25°-E前後にある。覆土は暗褐色でローム粒小量が混入する単一層である。ピットは検出されているものの性格は不明である。炉は検出できなかった。

遺物には古墳時代前期の土師器壺片が出土しており、本遺構はおそらくは該期のものと考えられる。

3号住居跡 (第22・23・25図、第9表、図版7・16)

奈良時代後半の住居跡である。検出範囲は住居跡全体の1/2程度であり、規模は横が4.75mで縦は不明である。主軸はN-47°-E前後であり、確認面から床面までの深さは9cm程度である。床面には焼土・炭化材が小量残存していた。カマドの位置は不明であり、床面はあまり硬くなかった。住居の性格については部分発掘なので結論は避けたいが、粘土などの工房跡をあらわすものが出土していないので通常のものである可能性が強い。

出土遺物は須恵器には短頸壺の蓋である蓋D(103)、壺(105)、壺(106)がみられ、土師器は上総型の杯(104)が検出されている。須恵器は永田・不入窯跡の製品と考えられる。

IV まとめ

1974年に発掘調査されて以来、永田、不入窯跡は数少ない千葉県内の須恵器生産遺跡の代表として取り上げられてきた。しかし、限られた調査資料をもとにした把握であったために、その全体像については諸見解があり、なかなか掘みきれないところが多かった。しかしながら今回の調査では18年ぶりに新たな窯体等を検出し、多くの資料を追加することになった。永田窯跡の構造・規模・性格等についての把握はもとより、房総地域の須恵器生産を考えるうえでも欠くことのできないであろう今回の調査を以下にまとめてみることにする。

1. 窯跡群の規模

今回の調査では、窯跡群の広がりおよび窯跡の基數確認、そして工房跡の有無の確認などを主眼にして調査を行った。その結果、窯跡4基、灰原3か所、窯跡の可能性がある焼土遺構2か所、溝3条が検出された。

第1の問題点である窯跡群の広がりについては、これまでの窯跡の分布範囲よりも相当に拡大することが判明した。今までの調査で最も台地の西寄りに位置すると考えられてきた永田1号よりもさらに西北40mの地点から15号窯跡(HII区)が検出され、またこの15号窯跡の南東400mの地点からも17号窯跡(DIV区)が確認されたことにより永田窯跡群は直線距離にして400m以上の分布範囲を有することが確実となった。また、窯構造としては、地下式となる17号窯跡と半地下式の15・16・18号窯跡があるが、この違いは時期的な差に起因していると考えられる。

これまでに確認されていた窯体は永田窯跡14基、不入窯跡4基であったが、今回の調査で永田窯跡で4基増加し、永田、不入窯跡の合計で22基となった。また、これら窯跡以外の灰原3か所も窯跡の基數に入れると25基は確実に存在すると考えられる。このほかにも焼土遺構など不確実なものを含めると窯跡の基數は30基以上に膨れ上がるものと推察される。

その根拠としては、15・16号窯跡が検出された第1・2トレンチの斜面下方で以前に行われた水田面灰原確認調査⁽¹⁾時には永田窯跡のなかでも最も古いと考えられていた14号窯跡に近い器種構成と形態を示した製品がみられたにもかかわらず、今回の調査で確認されたのはそれよりも新しい段階のものであり、15・16号窯跡近辺に14号窯跡と同時期に近い未検出の窯跡が存在する可能性があること。

また、1984年に行われた不入側の水田の灰原確認調査時に回転糸切り離し無調整の杯が検出されているが、今回の調査で永田側斜面に回転糸切り無調整の窯が検出されたことにより、不入窯でも回転糸切り離し無調整の杯が焼成されていたと考えができるようになったこと。さらに、今回の調査で検出することができなかったが、(財)市原市文化財センターが調査を実

施した永田遺跡平坦部の工房跡と考えられる竪穴からは、永田、不入窯跡の製品と考えられるもので、杯の口縁部外面中位まで回転ヘラケズリを施す調整技法を有する一群の土器が出土しており、それを焼成した窯が想定されることなどが挙げられる。

永田、不入窯跡で判明した窯跡の群分布は、これで3か所になったが、各群とも狭い範囲に窯跡が集中する傾向が読み取れる。とくにG II区からH II区の東側の区間は集中しており、120mにも満たない部分に17基の窯跡がみられる。

このような集中は何に起因するのであろうか。今後は、再度の斜面部の調査を行い、この集中が3地点にとどまるかどうかをさらに検討する必要があるものと思われる。

工房跡の有無については、台地平坦部で8世紀後半の竪穴住居2軒を検出したが、須恵器工房跡と断定できるものではなく通常の集落内住居と考えるべきものであった。しかしながら、住居跡のなかからは永田、不入窯跡の製品が当然ながら検出され、工房跡とは断定できないが、永田、不入窯の製作者集団とは何らかの関係があったことは間違いないものであろう。

この平坦部の調査面積は窯跡群が広がる範囲のごく僅かであり、今後の調査でロクロビットなどを備えた工房跡が検出される可能性は強いと考えられる。

2. 窯跡の変遷と出土遺物

(1) 今回の調査で確認された窯跡・灰原の時期は大まかに3期に区分することが可能である。

第Ⅰ期 17号窯跡を標式とする。

口径14cm前後で底部に全面回転ヘラケズリが施される高台付杯I Aおよび盤A～Dを主体とした生産がなされ、脚付盤やコップ形の杯I F、高台付碗A～Cなど供膳形態の器種が多様な時期であり、杯類の端部は金属器な鋭さを意識して作られている。なお、盤については同一形態のなかでの法量分化がうかがえる。

これらの盤・脚付盤類は上総地域の一般集落跡からの出土が稀なものであり、杯類も端正なつくりであり、官衙など特定の場所に供給されていた可能性がみられる。

該期には、灰原Aおよび灰原C・1号焼土遺構の遺物群も含まれ、灰原A→17号窯跡→灰原C・1号焼土遺構の順で変遷している可能性がある。

第Ⅱ期 15号窯跡を標式とする。

口径13cm前後の杯類が主体となり、高台付杯・盤の出土が減少する時期である。壺・壺の出土も顕在化する時期である。杯は底部に回転ヘラケズリを全面に施す杯I Dが多いが、外周のみに施され、底部中央部に回転糸切り離し痕が残存する杯II Aがみられるようになり、高台付杯の底部外面中央にも回転糸切り離し痕が残存するものも出土するようになる。

なお、このⅡ期は杯の調整技法的によって、底部全面回転ヘラケズリの杯が大多数を占める灰原Bと、全面回転ヘラケズリと外周のみのヘラケズリが3対2の出土量の15号窯跡との2小

期に分けることが可能である。

上総地域の集落にも一般的に製品が供給される時期の遺物である。

第三期 16号窯跡を標式とする。

盤・脚付盤の出土はまったくみられなくなり、底部回転糸切り離し無調整の杯III類が圧倒的多数を占める時期である。石川窯跡の製品とほぼ同時期の遺物群として評価されるものである。

なお、今回の調査で窯跡群にともなって検出された遺物は、蓋・杯・高台付杯・高台付椀・盤・高台付盤・脚付盤・壺・短頸壺およびその蓋、甕、鉢である。このなかで従来みられなかった技法・形態のものは、17号窯跡では脚杯盤の口縁部と同様な形態を呈する盤Dが挙げられ、16号窯跡では口径が12cm前後、器高が4cm前後で底部外面に外周回転ヘラケズリを行い、底部中央に回転糸切り離し痕を残す杯II Bと、それと同法量になると考えられる杯で底部外面全面を回転ヘラケズリするもの、高台径が7cm未満と矮小化し、底部外面に回転ヘラケズリを行わず高台を貼り付けている高台付杯III類が挙げられる。また、第1トレンチ出土の底部が非常に厚い鉢が挙げられる。

これらの時期の年代観については、年代の根拠となるものがなにもなく断定しがたいが、消費遺跡でのほかの遺物との共伴例から考えてII期については8世紀後半、III期については9世紀初頭前後と想定される。I期については、消費遺跡での出土がきわめて少ないために根拠が薄弱となるが、器種内容および丁寧で端正なつくりから、8世紀の中ごろでもより前にその生産の中心があったものと考えておきたい。

3. 底部切り離し技法の再確認

17号窯跡出土の高台付杯の底部に部分的にはあるがヘラ切りと考えられる痕跡が検出された。このヘラ切りの問題については、すでに山口直樹氏が永田、不入窯跡の発掘調査報告書のなかで永田5号窯跡「6層」出土の杯に、底部外周に回転ヘラケズリがなされ、中央にヘラ切り状の痕跡が残存するものがあることを指摘している。また、田所 真氏もヘラ切りの可能性のある杯の出土を報じており、今回、3点がまとまって窯跡内から出土したことによって、ヘラ切りが存在することがさらに明確になったと言えるであろう。

そして、今回のヘラ切りが問題となることは、ヘラ切り痕と考えられるもの以外はすべて底部の切り離し痕が回転ヘラケズリによって消されていることであり、しかもそれが出土した17号窯跡は現在確認されている永田窯跡群の窯跡でも最も古いものの一つと考えられることである。すなわち、17号窯跡の主体となる底部切り離し技法はヘラ切りであった可能性が強く、さらにあるいは、糸切り離しと同時期かもしくはヘラの切り離しの方が古く、永田窯跡本来の切り離しがヘラ切りであった可能性も考えられるのである。

いずれにしてもヘラ切と考えられるものの出土で、今まで形態や回転ヘラケズリ・糸切り

技法の共通点から東海系の窯であると目されてきたものの根拠をもう一度見直すことが必要になろう。

ヘラ切りは常陸地域でも多用されている。また、本窯跡群の南西約800mの地点に所在する7世紀前半の大和田窯跡⁽⁷⁾が存在する。窯の製品には当然ながら底部ヘラ切り技法が用いられており、このような在地の窯の操業が本地域で細々ながら続いている、この伝統を部分的に受け継いでいる可能性や、東海地域で岩崎25号窯跡⁽⁸⁾まで残存していたとされるヘラ切り技法が直接伝わった可能性等々が考えられ、興味深い。

4. 結語

今回の調査で注目されるのは、従来把握されていたもの以上に遺跡の規模が広く、また、操業の期間も長期にわたっていたことが明らかになったことである。とくに、石川窯跡と同様の製品を焼成していた窯が検出されたことは重要な成果の一つである。これまで永田、不入窯跡の生産が終了してから石川窯跡の生産が開始されたと考えられてきたが、これで永田窯と石川窯の操業が部分的に重なることが明確になった。今後は、この同時操業がどの程度存続していったかが、両遺跡を考える上で重要な点となるであろう。

また、これまで消費地でこれらの製品が出土した場合、永田・不入窯跡、石川窯跡の製品と区別して考えてきたが、第Ⅰ章第2節の研究略史でも述べたように木更津市に所在する上名主ヶ谷窯跡の製品のなかの高台付杯・杯は永田、不入窯跡のものと区別することは難かしく、また、石川窯跡と永田窯跡のものも部分的に分離することが困難な状況となった。上総地域の須恵器についてはそれぞれの窯跡の製品の属性および時期を再度確認する作業が必要であり、それまではこれらの窯跡群の製品を大きく上総地域産の製品として把握する以外はないと思われる。その意味では今回の調査は予想以上に大きな意味を持つものであった。

永田、不入窯跡には今回の調査で明らかになった以上の事実が未だ地下に埋もれている。そして、その学術的な資料としての重要性はもとより、郷土の貴重な文化財としての比重もより大きくなっている。調査担当者として今後さらに検討を加えることを責務とし、さらにこの地の総合的な調査の実施とそれに基づく保存・活用の推進を期待したい。

註

- (1) 大川 清 1976 「千葉県市原市 永田、不入須恵器窯跡調査報告書」 千葉県教育委員会
- (2) 田所 真 1989 「千葉県市原市 永田、不入窯跡」 (財) 市原市文化財センター
- (3) 山口直樹 1985 「千葉県市原市 永田、不入窯跡」 (財) 市原市文化財センター
- (4) 田所 真 1989 「永田遺跡」「市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡・柿崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡 - 不特定遺跡発掘調査報告(1)」 (財) 市原市文化財センター
- (5) (3)に同じ
- (6) (2)および(4)と同じ
- (7) 高橋康男 1988 「大和田遺跡」 (財) 市原市文化財センター
- (8) 齊藤孝正 1992 「東海地方の須恵器窯・猿投山・美濃須衛窯・湖西窯-」『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯跡の諸問題』 大戸古窯跡群検討会

第1表 15号窓跡および第1トレンチ出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	器高					
1	蓋A	(18.4)	—	2.0	1/6	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰褐色	
2	高台付椀A	(16.6)	(10.7)	5.6	底部1/3、口縁部1/4	黒色粒多々、白色砂粒中程度	良好	青灰色	自然釉付着
3	高台付椀B	(19.0)	—	—	1/7	白色砂粒、青母微粒	良好	青灰色	
4	高台付杯II	(12.6)	8.4	3.8	底部1/2、口縁部1/5	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	
5	高台付杯I C	—	6.6	—	底部3/4	白色砂粒、白色針状物質、青母粒	不良	黄褐色	
6	杯I D	(13.6)	(10.9)	3.3	1/2弱	白色砂粒、白色針状物質、青母粒	普通	绿灰色	外面火燒痕
7	杯I D	(12.4)	8.1	3.6	口縁部2/7、底部1/2	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質	普通	青灰色	内部火燒痕
8	杯I D	12.4	8.3	3.2	口縁部3/4、底部2/3	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	内部火燒痕
9	杯II A	(12.3)	(9.4)	3.1	2/5	白色砂粒	良好	青灰色	火燒痕
10	杯I C	(13.4)	(7.8)	4.8	底部1/2弱、口縁部1/7	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰褐色	1トレンチ出土

第2表 16号窓跡および第2トレンチ出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	器高					
11	杯III A	13.4	8.6	4.5	底部完、口縁部3/5	白色砂粒	良好	灰黃茶	内部火燒痕
12	杯III A	12.4	6.5	4.1	口縁部1/5欠	白色砂粒、白色針状物質、赤色粒	良好	赤褐色	黑斑
13	杯III A	12.4	7.2	3.9	口縁部1/8欠	白色砂粒、白色針状物質、赤色粒	良好	棕褐色	黑斑
14	杯III B	11.8	7.3	4.0	ほぼ完形	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質	普通	灰褐色	
15	杯III C	12.0	7.3	3.7	口縁部1/5欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	火燒痕
16	杯III B	12.2	7.2	4.0	口縁部わざかに欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	火燒痕
17	杯III D	12.4	6.9	4.1	口縁部1/7欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	黄褐色	火燒痕
18	杯III D	12.7	7.9	3.7	口縁部1/3欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	黄褐色	黑斑
19	杯III D	12.3	7.1	4.1	口縁部1/5欠	白色砂粒、白色針状物質	普通	黄褐色	黑斑
20	杯III D	12.1	7.9	4.1	底部完、口縁部3/4	赤色粒、白色砂粒、白色針状物質	普通	黑褐色	火燒痕 黒斑
21	杯III D	12.6	7.3	4.2	底部完、口縁部1/2	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	火燒痕
22	杯III D	12.9	7.6	3.8	底部4/5、口縁部1/2	白色砂粒、白色針状物質、赤色粒	普通	黄褐色	黑斑
23	杯III D	12.4	7.1	4.2	2/3	白色砂粒、石英粒子	不良	黄褐色	黑斑
24	杯III D	11.9	6.6	4.1	完形	白色砂粒、白色針状物質	不良	黄褐色	内部火燒痕
25	杯III D	12.0	7.7	4.0	口縁部一部欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	青灰色	内部火燒痕
26	杯II B	12.4	8.4	4.0	口縁部一部欠	白色砂粒、白色針状物質	普通	灰褐色	火燒痕
27	杯I E	—	8.1	—	底部のみ残存	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質	良好	灰褐色	
28	杯II B	(12.8)	8.0	4.0	口縁部1/3、底部1/2	青母細粒、白色砂粒、白色針状物質	不良	黑褐色	火燒痕
29	蓋	—	—	—	細部破片	白色砂粒、白色針状物質	普通	灰褐色	
30	蓋B	(15.0)	—	—	口縁部1/6	白色砂粒、白色針状物質	普通	灰褐色	
31	高台付椀A	—	—	—	口縁部破片	白色砂粒を僅か	良好	灰褐色	
32	高台付杯III	—	6.8	—	底部残存	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰褐色	火燒痕
33	蓋A	—	8.6	—	高台部残存	白色砂粒、白色針状物質	普通	灰褐色	
34	鉢	—	(8.0)	—	底部1/2弱	白色砂粒、白色針状物質、黒色粒	軟質	灰褐色	2トレンチ出土

第3表 17号窓跡出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	器高					
35	盤D	(19.8)	(8.5)	1.6	口縁部・底部1/4	白色砂粒多量、黒色粒	良好	灰褐色	火燒痕
36	盤C	(18.8)	(10.5)	1.5	口縁部、底部1/2弱	黒色粒多量、白色粒、白色針状物質	良好	灰褐色	
37	盤C	(19.0)	(10.6)	2.0	1/6残存	黒色粒、白色砂粒、石英粒	良好	灰褐色	火燒痕
38	盤B	(20.8)	(17.8)	1.7	口縁部2/5、底部1/4	黒色粒多量、白色砂粒	良好	灰褐色	内部火燒痕
39	盤A	(22.6)	(15.5)	2.1	1/4	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質	良好	灰褐色	
40	高台付盤	—	(14.9)	—	高台部破片	白色砂粒	良好	青灰色	内外自然釉
41	脚付盤	(21.4)	—	—	口縁部1/4	白色砂粒	良好	黑灰色	自然釉
42	脚付盤	(21.4)	—	—	口縁部1/2弱	白色小石・砂粒、白色針状物質	良好	灰褐色	
43	高台付椀B	(18.0)	10.1	6.1	口縁部1/2弱	黒色粒、白色砂粒	良好	灰綠色	火燒痕

44	高台付椀B	(16.7)	(11.4)	5.8	3/8	黒色粒多量。白色砂粒	良好	暗	灰	色	
45	杯I F	8.3	6.3	7.6	7/8	黒色粒多量。白色砂粒	良好	灰	色		
46	脚付盤	—	—	—	脚部1/2	白色砂粒	普通	灰	色		
47	蓋B	(14.8)	—	—	口縁部1/4	白色針状物質。白色粒、黒子粒僅	普通	灰	色		
48	高台付杯I A	14.3	10.5	3.7	2/3	黒色粒、白色砂粒。白色針状物質	良好	灰	白	色	
49	高台付杯I A	(14.0)	(9.0)	4.0	口縁部2/5、底部1/2弱	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	色		
50	高台付杯I B	(12.8)	(8.6)	4.1	1/4	白色砂粒、黒色粒	良好	灰	色		
51	高台付椀C	(17.5)	—	—	口縁部1/10	白色砂粒、黒色粒、白色針状物質	良好	灰	色		
52	高台付杯I A	(13.8)	9.1	3.7	口縁部1/2弱	黒色粒多量。白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	白	色	ヘラ切り痕
53	杯I B	(14.0)	(10.4)	3.7	口縁部1/5、底部2/5	白色砂粒	良好	青	灰	色	
54	杯I A	(14.1)	(11.8)	3.2	口縁、底部1/2弱	白色砂粒	良好	灰	白	色	
55	杯I C	13.9	8.7	3.8	口縁部1/3、底部完形	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質	普通	灰	白	色	
56	杯I A	(13.4)	9.1	2.8	底部中心部欠	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	白	色	※の窓印
57	蓋D	(13.1)	—	—	1/3	黒色粒、白色砂粒、白色針状物質僅	良好	灰	色		
58	蓋D	(13.0)	—	—	口縁部1/4	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	色		
59	短頸壺A	(11.1)	—	—	口縁部1/4	白色砂粒	良好	灰	色		
60	短頸壺B	(6.4)	(6.4)	7.4	1/4	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	色		
61	甕	—	—	—	脚部破片	白色砂粒	良好	青	灰	色	

第4表 灰原A出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎	土	焼成	色調	備考
		口径	底径	器高						
62	蓋C	(13.2)	—	3.6	口縁部1/4	白色砂粒	良好	青	灰	色
63	盤	—	(7.1)	—	底部1/5	白色砂粒、黒色粒。白色針状物質	良好	灰	色	火摩痕
64	高台付杯I A	(14.9)	9.9	3.8	底部4/5、口縁部1/3	白色粒、白色針状物質	良好	青	灰	色
65	杯I B	(14.5)	(9.6)	3.6	口縁部1/5、底部1/3	白色砂粒多量。白色針状物質僅	普通	灰	色	
66	杯I C	(13.9)	8.4	3.6	口縁部1/2弱、底部3/4	白色砂粒	良好	灰	赤	色
67	蓋A	(17.2)	—	—	口縁部1/4	白色砂粒	良好	青	灰	色
68	高台付椀A	(16.0)	—	—	口縁部1/4弱	白色砂粒、白色針状物質	良好	青	灰	色
69	甕	—	—	—	脚部破片	白色砂粒	良好	青	灰	色

第5表 灰原B出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎	土	焼成	色調	備考
		口径	底径	器高						
70	蓋	—	—	—	紐部	白色砂粒	良好	青	灰	色
71	杯I D	(13.0)	(8.2)	3.1	口縁部1/4	白色小石、砂粒多量	良好	青	灰	色
72	杯I D	(13.0)	(7.4)	3.0	2/5	白色砂粒、白色針状物質	良好	青	灰	色
73	高台付杯I C	—	(7.6)	—	底部2/7	白色砂粒	良好	青	灰	色
74	盤E	(22.4)	(7.6)	4.0	1/7	白色小石、白色砂粒	良好	灰	色	
75	蓋B	5.3	—	—	口縁部完形	白色砂粒	良好	茶	灰	色
76	甕	—	—	—	脚部破片	白色砂粒	良好	青	灰	色
77	甕	—	—	—	口縁部破片	白色砂粒	良好	灰	色	
78	蓋D	(12.5)	—	—	口縁部1/7	白色砂粒僅少	良好	青	灰	色
79	甕	—	—	—	肩部1/8	白色砂粒僅少	良好	灰	褐	色
80	高台付椀B	(18.2)	10.6	6.8	口縁部1/4、底部1/2	白色砂粒、白色針状物質	良好	灰	色	
81	高台付椀A	(15.1)	—	—	口縁部1/6	白色砂粒、白色針状物質	良好	青	灰	色
82	高台付椀D	—	(10.2)	—	底部1/6	白色砂粒	良好	灰	色	
83	甕A	8.0	—	—	口縁・瓶部完形 肩部破片	白色砂粒僅少	良好	青	灰	色
84	甕A	—	(9.7)	—	底部2/5	白色砂粒僅少	良好	青	灰	色
										自然軸付着

第6表 18号窯跡出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	燒成	色調	備考
		口径	底径	器高					
85	杯III D	12.2	6.9	3.8	5/6	黑色粒、白色砂粒、白色針狀物質	普通	灰色	火燒痕
86	杯III A	12.7	7.7	3.9	1/2	黑色粒、白色砂粒、白色針狀物質	良好	灰色	火燒痕
87	杯III D	12.6	7.0	4.2	3/5	白色砂粒、白色針狀物質	良好	灰褐色	火燒痕
88	杯III B	(12.2)	6.8	3.5	口緣部1/2弱、底部完	白色小石、白色砂粒、白色針狀物質	良好	灰色	火燒痕
89	杯III D	11.7	6.9	3.5	4/5	白色砂粒、白色針狀物質	良好	灰色	火燒痕
90	杯III B	12.3	7.4	3.8	口緣部3/5、底部完形	白色砂粒、白色針狀物質	不良	灰赤褐色	
91	杯III D	13.0	8.1	3.9	口緣部3/5、底部完形	白色砂粒、白色針狀物質、赤色粒	不良	黄灰色	
92	杯III D	(12.8)	(7.7)	3.8	口緣部1/4、底部1/3	白色砂粒、白色針狀物質	普通	灰赤色	火燒痕
93	杯III D	12.8	7.9	4.3	口緣部1/2、底部完形	白色砂粒、白色針狀物質、赤色粒	不良	灰褐色	

第7表 灰原C出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	燒成	色調	備考
		口径	底径	器高					
94	杯I B	(14.0)	(10.2)	4.0	1/4	白色砂粒	不良	橙褐色	

第8表 1号住居跡出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	燒成	色調	備考
		口径	底径	器高					
95	杯III D	(12.3)	7.9	4.2	口緣部1/5、底部完形	白色砂粒、赤色粒	普通	黃褐色	黑斑
96	杯III D	(12.2)	7.8	4.0	1/2	白色砂粒	普通	灰色	火燒痕
97	杯III D	12.5	8.2	4.1	口緣部3/4、底部完形	赤色粒多量、白色砂粒	不良	灰褐色	
98	杯	(12.2)	—	—	口緣部1/3	黑色粒、白色砂粒	普通	灰色	火燒痕
99	高台付陶D	—	9.8	—	底部3/5	白色粒、白色針狀物質	普通	灰色	
100	鉢	(22.8)	10.4	11.4	底部1/2	白色砂粒	良好	灰色	
101	土師器蓋	(22.6)	—	—	口緣部2/5	石英粒子、白色砂粒	普通	橙褐色	
102	燧石	—	—	—	上部一部破損		—	灰白色	流紋岩

第9表 3号住居跡出土遺物

番号	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	燒成	色調	備考
		口径	底径	器高					
103	蓋D	(10.2)	—	—	口緣部1/6	白色砂粒僅少	良好	暗灰色	外側自然釉
104	土師器杯	(14.6)	(9.0)	4.0	2/5	白色砂粒、白色針狀物質、赤色粒	普通	橙褐色	
105	甕	—	—	—	口緣部破片	白色砂粒	良好	灰色	
106	蓋	—	—	—	胸部1/5	白色小石、白色砂粒	良好	青灰色	

写 真 図 版



永田、不入窯跡と周辺の地形(1/12,500)

1. 水田窯跡遠景
(南から)



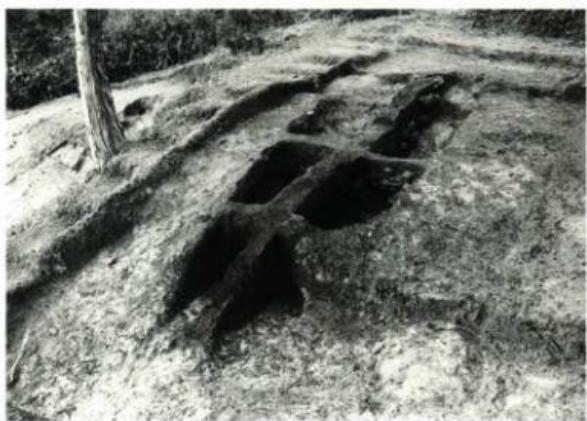
2. 水田窯跡遠景
(西から)



3. 第1トレンチ15号窯跡
検出状況
(南から)







1. 16号窯跡全景
(南東から)



2. 16号窯跡
遺物出土状況
(北から)



3. 16号窯跡全景
(北から)



1. 16号窓跡全景
(南から)



2. 第4トレンチ全景
(東から)



3. 第4トレンチ
灰原A・Bセクション
(北西から)



1. 第4トレンチ
17号窯跡セクション
(北から)



2. 第5トレンチ全景
(東から)



3. 第5トレンチ
2号焼土遺構、3号溝
検出状況
(南東から)



1. 第5トレンチ18号窯跡
遺物出土状況
(南から)



2. 第3トレンチ1・2号住居跡
検出状況
(南から)



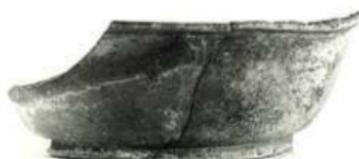
3. 第3トレンチ3号住居跡
検出状況
(東から)



1



5



2



3



7



8



9



12



4



15



6



14



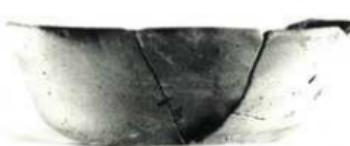
16



25



17



23



18



24



26



28



19



21



20



34



32



27



33



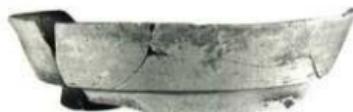
42



46



41



48



38



30



54



49



43



40



44



35



36



39



45



52



56



47



53



57



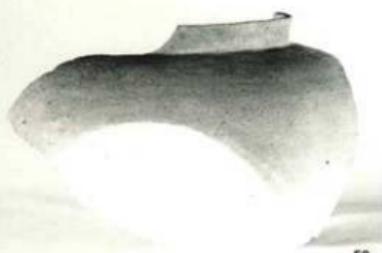
55



58



60



59



62



61



64



66



70



74



65



71



67



72



68



73



75



69



84





94



95



96



101



97



104



100



99



102



106

抄 錄

フリガナ	イチハラシナガッタヨウセキグンハツツヨウサホウコクショ
書名	市原市永田窯跡群発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第238集
編著者名	郷畠英司・小林信一
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡 809番地2
発行年月日	1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
永田窯跡群	市原市久保 697-13他	219	063	35°21'40"	140°9'60"	19921001- 19921030	200m ²	国庫補助事業 による学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永田窯跡群	生産	奈良時代	須恵器窯 4基 灰原 3か所 焼土遺構 2か所 溝 3条 竪穴住居跡 3軒	須恵器 蓋・高台付椀・杯・高台付杯盤・脚台付盤・短頸壺・壺・鉢等	窯の1基は地下式 3基は半地下式

千葉県文化財センター調査報告第238集
市原市永田窯跡群発掘調査報告書

平成5年3月31日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2号
印 刷 株式会社 弘文社

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。